付篇

周防・長門における弥生時代前期から古墳時代前期前半の土器編年をめぐる研究史と今後の課題

田畑　直彦

1．はじめに

筆者はこれまで、山口県（周防・長門）の弥生時代前期から古墳時代前期前半の土器編年について検討を行ってきた（田畑2001a・b・c、2003a・b、2004、2006b・c、2012a、2013a）。周防・長門においては、他地域と比較して良好な資料が少ない上、土器様相が複雑である。このため、時代により時期的な位置づけが変化した土器も少なくない。土器の編年的位置づけが変われば、当然のことながら、遺跡・遺構・遺物の評価もこれに連動するので問題は大きい。周防・長門の弥生土器の編年研究については、これまで山本一朗氏（山本1979・1996）や小野忠熙氏（小野1985）によって研究史が整理されている。本稿では、その後の研究を踏まえ、これまで発表された主要な論考[註1]を概観し、編年観の変遷と今後の課題について述べたい。

本稿の時期区分については表12にまとめた。対象とする時期は弥生時代前期から古墳時代前期前半、布留1式（寺沢1986）併行期までである。詳細は前掲文献及び以下の本文を参照されたい。ただし、各論考の紹介部分では煩雑さを避けるため、時期区分は各論考に準拠した。また、周防の弥生時代中期を特徴づける垂下口縁壺については、中期中葉以前のものを垂下口縁壺A類、中期後葉に定型化したものをB類と呼称する。

周防・長門における弥生土器の研究として、古くは昭和初期の弘津史文氏の集成（弘津1928・1929）や森本六爾氏[註2]（森本1930）、山本博氏（山本1935a・b）による長門の弥生土器の検討、東京考古学会による編年[註3]（森本・小林編1938）などがあるが、より本格的な研究は第二次大戦後になってはじまった。以下、具体的に述べていく。

2．1950～1970年

『島田川』の編年（1953、1956）

1953年、山口大学島田川遺跡学術調査団により刊行された『島田川－周防島田川流域の遺跡調査報告』（以下『島田川』と省略）で、小野忠熙氏は島田川流域の弥生土器の編年を行った（図52　小野1953b）。小野氏は島田川流域の弥生土器を『大和唐古弥生式遺跡の研究』（小林・末永・藤岡1943　以下『唐古』と省略）や九州、瀬戸内の土器を参考にして、Ⅰ～Ⅴ形式に分類した。このうち第Ⅰ形式は遠賀川式、第Ⅱ形式は唐古第二様式、第Ⅲ形式を唐古第三・四様式、第Ⅳ形式を唐古第五様式、第Ⅵ形式を弥生時代終末に相当するとした。第Ⅱ形式は壺の頸部に沈線や貼付突帯をもつものなど、第Ⅰ形式に近似するとされた土器、第Ⅲ形式は、岡山遺跡B地区壕状遺構出土土器等があてられた。

筆者の編年観でみると、①第Ⅱ形式・第Ⅲ形式は中期中葉から後葉の土器が混在している、②中期中葉に位置づけられる壺（図53－11）を第Ⅲ形式最下段、すなわち中期末に位置づけている点に問題がある（図52）。上記は中期前葉、中期末（中期Ⅳ）の土器が少ないなか、『唐古』編年をあてはめようとした結果生じたものであろう。そのほか、第Ⅳ形式には天王遺跡C区出土の土器棺があてられているが、これらは凹線文を持つものが後期前葉、複合口縁をもつものが後期後葉に位置づけられる。第Ⅴ形式については若干中期の土器がみられるが、大半が終末期の土器である。小野氏の編年は、『唐古』と異なり、遺構に伴う土器がきわめて少なく、採集品を含めた出土状況不明の土器を主な対象とせざるを得な

かったこともあり、上記の問題を残したが、編年の大枠が提示された意義は大きい。その後、小野氏は岡原遺跡の調査報告の際、この編年を補正し、第Ⅳ形式の後半と第Ⅴ形式を「弥生式晩期」の亜式とし、前者を亜式Ⅰ、後者を亜式Ⅱとした[註4]（小野1956）。

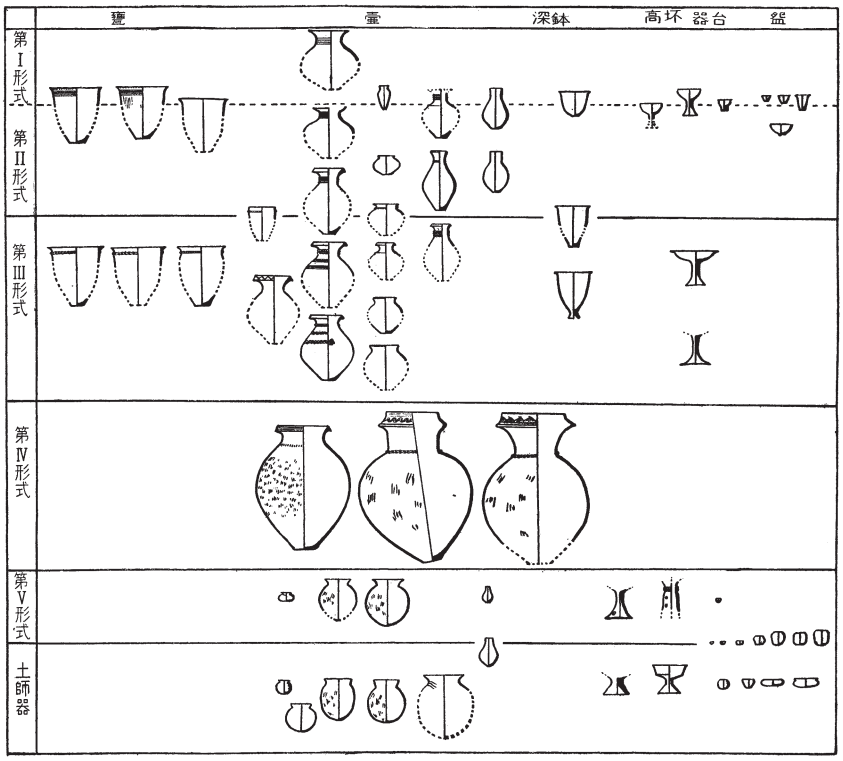

図52『島田川』による編年（小野1953b）

小田富士雄氏による編年（1957）

1957年、小田富士雄氏は下関市長府博物館の館蔵品を整理し、報告を行った（小田1957）。小田氏は同館館蔵品を第1～9類に分類し、第1～4類を前期、第5・6類、壺の第7・8類を中期、壺の第9類、甕の第7～9類を後期に位置づけた。筆者の編年観では、第1・2類が前期中葉、第3類が前期後葉、第4類が概ね中期前葉に相当し、後期とされた土器の一部には中期の土器を含む。この編年で注目されるのは、内折口縁土器を含む第4類を「中期のある時期まで継続する可能性が大きい」と位置づけたことで、現在の編年観の嚆矢となった。また、この編年案により、長門における弥生時代前期から中期前葉の編年の骨格が提示された。

中野一人氏による編年（1960、1962、1965）

1950年代には、綾羅木郷遺跡、梶栗浜遺跡、土井ヶ浜遺跡の発掘調査が行われた（山口県教育委員会編1961）。中野一人氏はこれらの成果なども参考にして山口県の弥生土器を集成し（中野1960）、編年と地域色についての論考を発表した（中野1962・1965）。中野氏は長門で壺を第一～四式、甕を第一～三式に分類し、周防で壺を第一～六式、甕を第一～三式に分類した。筆者の編年観では長門の壺は第一式が前期前葉から中葉、第二式は前期後葉から中期前葉、第三式は須玖式で中期前葉から後葉、第四式は後期から終末期に相当し、甕は第一式が前期、第二式が須玖式で中期後葉、第三式が後期に相当する。周防では、壺の第一式が前期、第二式が中期後葉に相当する。第三式は中期から終末期の壺・甕が混在している。第四式は後期前葉、第五式は後期後葉から終末期、第六式は終末期に相当する。甕は第一式が前期、第二式が中期中葉から後葉に相当する。第三式は中期の土器とみられる。編年では、長門で中期に壺の第二式と三式が併行するとした点など、誤りもみられる。しかし、中野氏の研究は山口県域全体を対象とした弥生土器編年の嚆矢であり、編年は周防と長門で二元的にとらえる必要があること、中期には厚東川を境に土器様相が異なることを指摘した点は卓見であった。

土井ヶ浜Ⅰ～Ⅳ式の設定（1961）

1961年に刊行された『日本農耕文化の生成』で、金関丈夫・坪井清足・金関恕氏により土井ヶ浜遺跡の概要報告が行われた（金関ほか1961）。埋葬遺構や遺物包含層からは前期から中期の土器が出土

し、筆者の編年観では中期前葉に位置づけられる内折口縁を持つ壺(図53-4)を含めた前期末から中期前葉の土器が土井ヶ浜Ⅰ式として、前期末に位置づけられた。中期の土器は須玖式土器が土井ヶ浜Ⅱ式(図53-6)、櫛描文をもつ壺(図53-7)が土井ヶ浜Ⅲ式とされ、これに両者の折衷土器を加えた3類に分類された。しかし、同年に刊行された『弥生式土器集成資料編2』における坪井清足氏の報告(坪井1961)で、「1埋葬人骨の周辺から検出された1群の土器」に土井ヶ浜Ⅱ式、Ⅲ式両者が含まれることから、土井ヶ浜Ⅱ式・Ⅲ式は同時期に存在した別系統の土器と考えられる。[註5] また、埋葬遺構の上層で検出された土器については土井ヶ浜Ⅳ式として土師器に位置づけられた。上記の坪井氏の報告では、土井ヶ浜Ⅳ式の出土地点が報告されている。これによれば、出土土器は各地点で型式学的なまとまりがある。筆者の編年観ではE地点出土土器は後期後葉から終末期前半、A・B地点出土土器は終末期、D地点出土土器は終末期後半から古墳時代前期に位置づけられる。

『弥生式土器集成本編』の編年(1964)

1964年に刊行された『弥生式土器集成本編1』では、金関恕氏により「山陰地方Ⅰ」として、周防・長門の弥生土器編年が行われ、第Ⅰ～Ⅴ様式に大別された(金関1964)。このうち、第Ⅰ様式は前期、第Ⅱ～Ⅳ様式が中期、第Ⅴ様式が後期に位置づけられた。

筆者の編年観では第Ⅰ様式は前期前葉から前期後葉、第Ⅱ様式は前期後葉から中期前葉の土器が含まれる。金関氏は後に上記を認めて撤回した(金関1980)。また、金関氏は第Ⅲ様式を北九州第Ⅲ様式と等しい類、山陽地方第Ⅲ様式に類するもの、両者が変化したものの3類で設定し、第Ⅳ様式を第Ⅲ様式と比較して無文化する傾向の強い土器をあてた。そして第Ⅳ様式は様式としての分離は成功したとはいいがたいとした。筆者の編年観では第Ⅲ様式、第Ⅳ様式とも中期中葉～後葉の土器が含まれている。第Ⅳ様式の土器のうち、筆者の編年観で中期末(中期Ⅳ期)に位置づけられるのは上久原遺跡出土の伊予系高坏(梅木2004b 本稿図53-12)、吉母浜遺跡出土の甕、鎧遺跡出土の甕の3点である。第Ⅴ様式には後期前葉から終末期前半の土器がみられる。

『日本の考古学Ⅲ』の編年(1966)

1966年に刊行された『日本の考古学Ⅲ』において、潮見浩氏・藤田等氏は中国・四国地方の弥生土器を7段階に大別した(潮見・藤田1966)。また、2年後に刊行された『宇部の遺跡』で、藤田等氏は山口県内の各時期の土器を概説した(藤田1968)。図53は潮見・藤田1966による周防・長門の編年をまとめたものである。[註6] 第一様式は北部九州の立屋敷式、畿内・唐古Ⅰa式に対比できる土器とされ、第二様式は土井ヶ浜Ⅰ式があてられた。第三様式は「古式櫛目文(櫛描文※筆者注)」が出現する段階で、長門では該当する土器がなく、周防では中郷貝塚出土土器(図53-5)があてられている。第四様式は「櫛目文」が盛行した段階で、土井ヶ浜Ⅱ式・Ⅲ式土器があてられ、中山Ⅳ式との併行関係が示された。第五様式は北四国・山陽・山陰で凹線文が発達する段階で、長門では下関市楠乃(馬場遺跡か)出土土器(図53-9)、鎧遺跡出土土器(図53-10)、周防では岡山遺跡B地点出土の壺(図53-11)、上久原遺跡出土の伊予系高坏(図53-12)があてられている。第六様式は後期前半に位置づけられ、五月田遺跡出土の壺(図53-13)があてられている。第七様式は後期後半に位置づけられ、複合口縁壺が出現する段階とされた。御屋敷山遺跡出土の壺(図53-14)と天王遺跡出土の鉢(図53-15)があてられている。

上記の編年では、土井ヶ浜Ⅰ式の内折口縁をもつ土器が前期後葉の第二様式に位置づけられていること、筆者の編年観では中期中葉に位置づけられる岡山遺跡B地点の壺が中期後葉の第五様式に位置づけられている点に問題がある。なお、周防の垂下口縁壺B類については触れられていないが、藤田1968で中期後半に位置づけられた。また、潮見氏・藤田氏は土器様相について、①前期では、阿方式

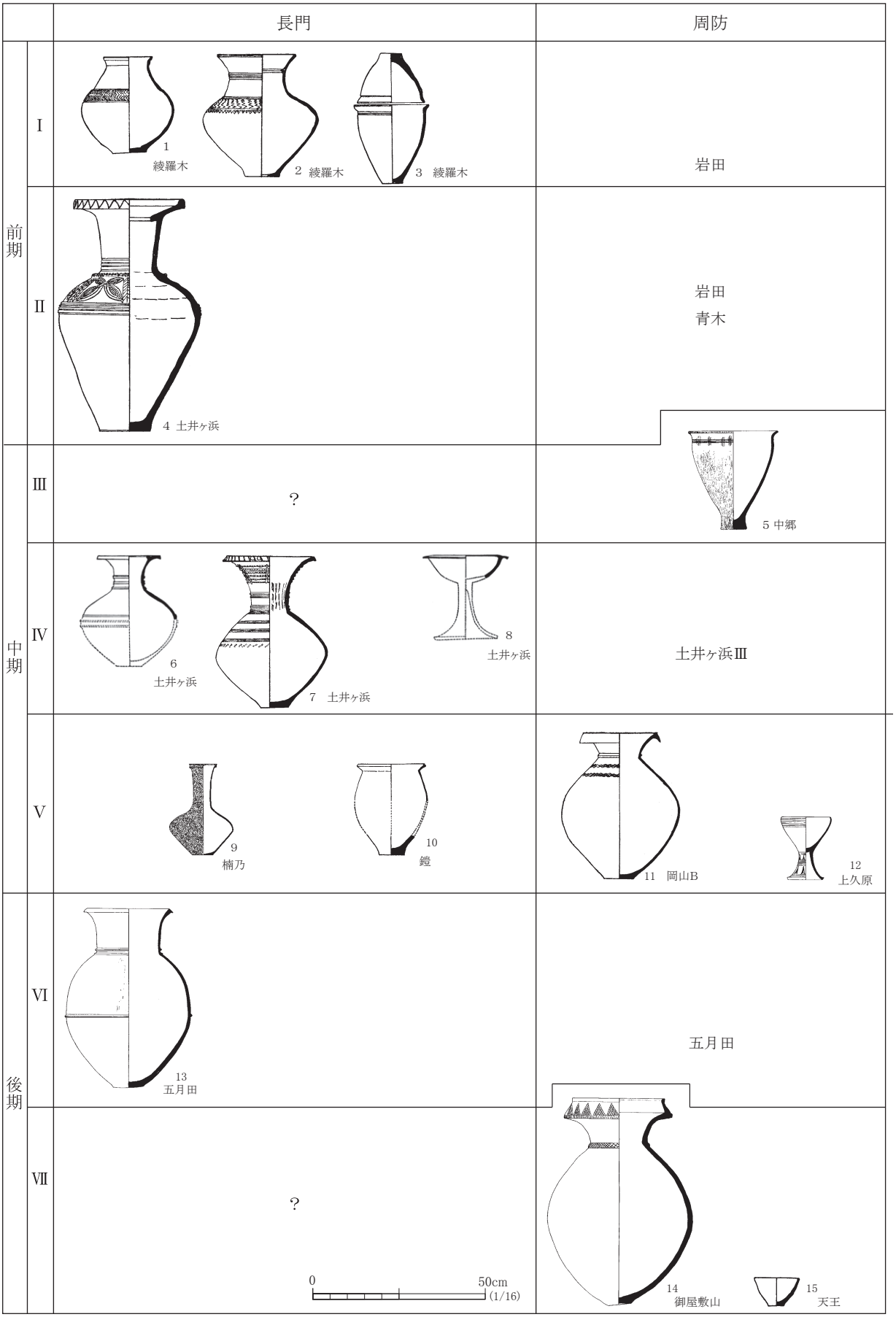

図 53『日本の考古学Ⅲ』による編年（潮見・藤田 1966 より作成）

の影響が周防・長門にみられること、②中期では、長門は北部九州の強い影響下にあること、③後期後半に複合口縁壺が出現・盛行することを指摘した。③の複合口縁壺の出現時期は後期前葉に遡ることが判明しているが、その他は周防・長門の土器をとらえる上で重要な事象である。以上、中国・四国地方の中で周防・長門の土器が位置づけられたことで、その後の編年案に大きな影響を与えた。

3．1971～1985年

中野一人氏による集成（1972）

1972年に中野一人氏は須恵器を含まない古式土師器と考えられる土器について、集成・検討を行った（中野1972）。山口県全域を対象に集成が行われたことは画期的であったが、同氏が指摘するように編年の基準が明確でなく、良好な資料が欠けていたため、十分な考察が行える状況ではなかった。筆者の編年観では、集成された土器は弥生時代後期から古墳時代中期の時期幅をもつ。

綾羅木式土器（概要）の提示（1974）

1974年に刊行された『えとのす』1号において、伊東照雄氏は綾羅木郷遺跡の発掘調査に基づき、同遺跡出土の弥生時代前期から中期前葉の土器編年案（図54）を発表した。この編年では綾羅木Ⅰ～Ⅳ式の概要が示された[註7]（国分ほか1974）。なお、後にⅣ式とされた内折口縁壺（図54-8）は、この段階では綾羅木Ⅲ式とされた。

上原遺跡の編年（1976）

1976年、冨士埜勇氏は上原遺跡の報告で、出土土器をⅠ～Ⅴ類に編年し、綾羅木式土器の編年に準じて、Ⅰ～Ⅳ類を綾羅木Ⅰ～Ⅲ式、第Ⅴ類を城ノ越式土器に対比させた（冨士埜編1976）。

『山口考古』特集号（1977）

1977年に、山口考古学会の機関誌『山口考古』で弥生式土器の特集号が編まれた。この中で伊東照雄氏は前期をⅠ～Ⅲ期、中期を前半、中頃、後半に区分した（伊東1977）。前期は『えとのす』1号の編年によっており、中期は城ノ越～須玖式土器の編年に準じている。なお、Ⅲ期はⅢ－1～3に細分された。Ⅲ－1が後のⅢ式A、Ⅲ－2がⅢ式B、Ⅲ－3がⅣ式a（内折口縁壺）に対応すると考えられる。

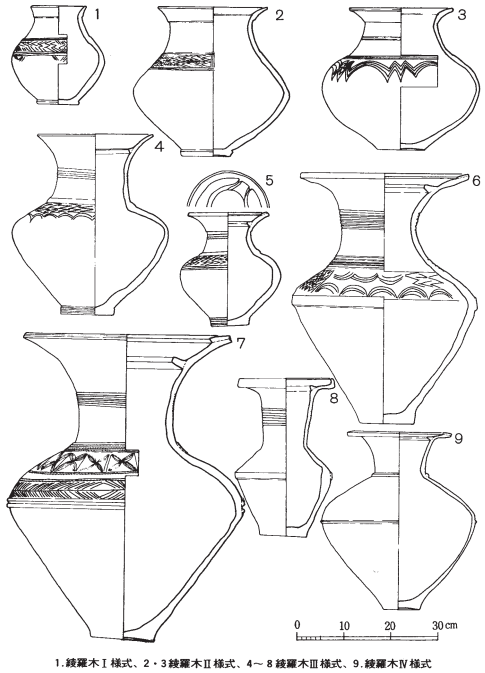

図54 綾羅木式土器の編年（国分ほか1974）

山本一朗氏は周防の弥生土器をⅠ～Ⅷ期に区分し、一連の論考の基礎となる編年観を提示した（山本1977）。

中野一人氏は前稿（中野1962）を補う形で、弥生土器の地域を論じた（中野1977）。具体的には須玖式土器、垂下口縁壺の分布図を提示し、前者が長門から周防西部に、後者が周防及び長門の一部に分布することを提示した。資料が増加した現在でも上記の傾向が認められる。

また、中期の土器様相について、垂下口縁壺が中期全般に分布すること、「櫛目文」が中期に少なく、後期以降に使われること、凹線文は少なく後期になってやや多く流入したとした。一方、後期の複合口縁壺については、垂下口縁壺から発展過程を示すものがあると指摘した。

上記のうち、櫛描文について当時の資料の制約からそのように解釈されたものの、現在では中期でも一定量存在

することが判明している。凹線文と複合口縁壺の成立過程については後述する。以上の解釈は、資料の制約からやむを得ないものであったが、その後の編年案にも引き継がれることとなった。

秋根様式の設定（1977）

1977年に秋根遺跡の報告書が刊行され、出土した「土師器」が秋根1～5様式に区分された（伊東編1977）。筆者の編年観では、秋根1様式の大半が終末期に位置づけられ、2様式の土器には終末期から古墳時代前期前半の土器が含まれている。一方、3様式に位置づけられたLK093出土土器は布留2式併行の良好な一括資料である。秋根様式は時期幅をもつ溝出土資料も対象とした関係上、時期区分に問題を残したが、土井ヶ浜Ⅳ式の設定以後、弥生時代終末期から古墳時代前期のまとまった資料が遺構単位で多数提示されることとなり、その意義は大きい。

『高地性集落跡の研究・資料篇』の編年と併行関係の検討（1979）

1979年、小野忠熙氏を代表として実施された「弥生系高地性集落址の研究（1972～1974）」、「弥生系高地性集落遺跡の機能と編年の研究（1975～1976）」の資料篇として、『高地性集落跡の研究・資料篇』（小野編1979）が刊行された。同書では、高地性集落跡の比較・検討を行うにあたって、北部九州と畿内の間に顕在化していた弥生土器編年の調整を行うべく併行関係の検討が行われ、佐原真氏・小田富士雄氏により、弥生土器がⅠ～Ⅴ期に区分された（表10 佐原・小田1979）。ここで示された須玖Ⅰ式－土井ヶ浜Ⅱ・Ⅲ式－中山Ⅳ式の併行関係は、佐原氏の『紫雲出』における指摘をもとにしている（佐原1964）。また、佐原氏・小田氏は九州と瀬戸内・近畿地方との編年のズレを調整するため、原ノ辻上層式（高三潴式）を畿内のⅣ様式に併行させた。その後の研究は平美典氏の整理（平2004）に譲るが、九州～瀬戸内における搬入土器の検討結果から、現在の編年観では北部九州と瀬戸内の編年に大きなズレはないとする見解が主流である。また、北部九州において編年の共通認識が確立していないため、なお検討が必要であるものの、筆者は田崎博之氏（田崎1998）、平美典氏の検討結果から、高三潴式新段階と瀬戸内の後期初頭との併行関係を認めるので、須玖Ⅱ式新段階と高三潴式古段階が瀬戸内の第Ⅳ様式に併行すると考えている。

同書では、小田富士雄氏により周防・長門の弥生土器についても解説された（小田1979）。小田氏は綾羅木Ⅰ－Ⅱ－Ⅲ式が北部九州の板付ⅡA－ⅡB－諸岡（前期末）に対比でき、豊前の下伊田－立屋敷－高槻に最も近いとした。また、阿方式との交流が周防・長門のほか、豊前宇佐地方にもみられることから、前期には周防灘文化圏とでも称しうる文化小期が設定できると指摘した。Ⅱ期は城ノ越式土器の段階で、長門ではこれに共通する様相を示すものとして、綾羅木Ⅳ式土器[註8]、土井ヶ浜Ⅰ式土器、伊倉遺跡15号土壙出土土器が提示された。Ⅲ期は須玖式土器の段階である。小田氏は広島県中山貝塚における中山Ⅳ式と須玖Ⅰ式甕との共伴事例、福岡県鹿部山遺跡における城ノ越式、須玖Ⅰ式土器などと共伴した中山Ⅳ式相当とする壺から、須玖Ⅰ式－土井ヶ浜Ⅱ・Ⅲ式－中山Ⅳ式の併行関係が実証されるとした。Ⅳ期は原ノ辻上層（高三潴）式の段階である、西部瀬戸内では凹線文系土器が盛行する段階であるが、周防・長門においては両者とも僅少であるとされ、具体的な記述はない。Ⅴ期は下大隈式・西新式の段階である。小田氏は複合口縁壺の分布が安芸から豊後に至ることから、周防がその中心地域を形成していると述べた。また、後期後半には西新町（筑前）－高島式（豊前）－安国寺式（豊後）－土井ヶ浜Ⅳ式（長門）－吹越式（周防）の併行関係を指摘した。

小田氏の解説は長門の土器が中心であり、周防についての記述は少ない。編年表では周防のⅡ期に「吉田」と記載されており、恐らく吉田遺跡（山口大学吉田構内）出土土器のことを指すと思われるが、

表10 『高地性集落跡の研究』による編年（佐原・小田1979）

	筑前	豊前	長門	周防	安芸	北四国	南四国	山陰
Ⅰ	板付Ⅰ 板付ⅡA 板付ⅡB （諸岡）	長井 下伊田 原28号 台ノ原B35号 （高槻・長井）	（中ノ浜） 綾羅木Ⅰ 綾羅木Ⅱ 綾羅木Ⅲ	＋ 宮ノ原 （下東）	中山ⅠA 中山ⅠB 中山Ⅱ	室本 三井 阿方	入田Ⅰ 西見当Ⅰ 西見当Ⅱ 大篠	タテチョウ （原山） 鰐石 ＋
Ⅱ	城ノ越	馬場山33号	綾羅木Ⅳ （伊倉15号土坑）	吉田	中山Ⅲ	五条Ⅲ	田村	亀嵩
Ⅲ	須玖Ⅰ 須玖Ⅱ	馬場山Ⅶ溝 馬場山51号	土井ヶ浜Ⅱ・Ⅲ 北迫貝塚	岡山B （宮ケ久保）	中山Ⅳ ＋	北谷 （土居窪Ⅲ） 紫雲出Ⅱ	城 北カリヤ	＋ 天神 （大道原）
Ⅳ	原ノ辻上層 （高三瀦）	＋	（鎧）	（大円寺の一部）	塩町	紫雲出Ⅲ	バーガ森北	知井宮 （青木Ⅰ）
Ⅴ	下大隈 西新	（別府） 高島 （別府）	＋ 土井ヶ浜Ⅳ	天王C 吹越A4号	樋渡 （神谷川） 西山最上層 （金平A地点）	八堂山Ⅱ 原	神西 ヒビノキⅠ ヒビノキⅡ	波来浜 九重
土師器	柏田Ⅰ	（豊田町）	秋根	楠木町				鍵尾Ⅰ 的場

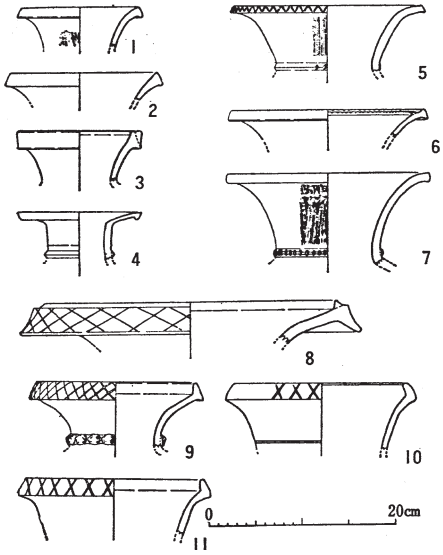

図55 井上山遺跡出土土器（中野1984）

具体的にどの土器を対象としているのかは不明で、宮ヶ久保や大円寺についても同様である。また、小田氏が指摘する須玖Ⅰ式－土井ヶ浜Ⅱ・Ⅲ式－中山Ⅳ式の併行関係についてであるが、土井ヶ浜Ⅱ式の鋤先口縁の壺（図53-6）が須玖Ⅰ式新段階～須玖Ⅱ式古段階に位置づけられること、頸部に多条の貼付突帯と棒状浮文をもつ壺が中国・四国地方では中山Ⅳ式（安芸Ⅲ－1様式（妹尾1992））より後出することから（柴田2004）、須玖Ⅰ式、中山Ⅳ式については各々1段階時期を下げた併行関係が考えられる。上記とⅣ期の併行関係の問題を除けば、概ね現在の編年観に通じるものであり、その後の研究に多大な影響を与えた。

中野一人氏による中期土器の併行関係の検討（1979、1982～1984）

1979年に高地性集落として知られる井上山遺跡の報告書（乗安・吉瀬編1979）が刊行された。同書で中野一人・吉瀬勝康氏は出土土器の考察を行い、岩国市河池遺跡貯蔵穴出土土器（前田編1982）の様相を加味して、垂下口縁壺が北部九州の須玖Ⅱ式、広島県の中山Ⅳ式と併行する可能性を示唆した。この点について中野氏は1983年、1984年にも詳しく再論し、上記の併行関係を断定した（中野1983・1984）。また、中野1984では、山口県の弥生土器を概観し、井上山遺跡出土土器のうち、図55－1・2のように口唇部を肥厚させるもの、5のように口唇部に鋸歯文を施すものを「古い形式とみるか退化形式とみるかが問題」と指摘し、垂下口縁壺の上面に粘土帯を貼り付けるもの（図55－8）、内折口縁壺（図55－9～11）を後期の複合口縁への移行を示す土器と位置づけた。凹線文については、沈線状の施文になったものがみられること、中期よりも後期の土器に多くみられると指摘した。一方、中野1984では、下右田遺跡・右田・一丁田地区A－1溝出土土器と吹越遺跡A地区第4号住居出土土器（以下A－4号と省略）を後期終末に位置づけた。

河池遺跡貯蔵穴では下層から垂下口縁壺A類が出土し、上層から垂下口縁壺B類が出土している。中野氏はこれをほぼ同時期として、中山Ⅳ式との併行関係を断定したわけであるが、筆者の編年観では上層・下層は時期差であり、後者と中山Ⅳ式が併行関係にあると考えている。中野氏が上記で指摘した井上山遺跡出土土器は、図55－8を除き、概ね中期中葉に位置づけられる。凹線文については、資料が増加した現在、中野氏の見解が正しいことが明らかとなった。下右田遺跡・右田・一丁田地区出土土器と吹越遺跡A－4号住居出土土器については後述する。

下右田遺跡の編年（1979）

1979年に刊行された下右田遺跡第3次発掘調査概報（山口県教育委員会編1979）では、弥生時代中期後半から終末期までをⅣ期に区分する編年案が発表された。筆者の編年観ではⅣ期の土器の多くが古墳時代前期前半に位置づけられる。

周陽考古学研究所による弥生土器・土師器の編年（1979、1981）

1979年、山本一朗氏が主宰する周陽考古学研究所は『山口県の弥生式土器－集成と編年－』を刊行した。同書で池田善文氏は、美祢市秋吉台周辺の弥生土器を紹介するとともに、同地域における前期から終末期の概略的な編年案を発表した（池田1979）。また、山本一朗氏は同書及び、1981年に相次いで、山口県の弥生土器と土師器の編年案を発表した（山本1979・1981）。上記の編年案は1970年代の大規模開発に伴う発掘調査で出土した資料を中心に、山口県全体を対象とし、山本1979では地域色を考慮して周防・長門と両者の中間地帯（現在の山口市・防府市域）の3地域別に編年を行った。当時は資料が増加したとはいえ、現在からみれば、十分なものではなかった。このため、編年を行うには遺構に伴わない土器、出土状況が不明な土器も使用せざるを得ない状況にあった（山本1996）。そのような状況を踏まえれば、山本氏の編年は大変な労作であったといえる。また、現在に至るまで、上記に並ぶ包括的な編年案は提示されておらず、その功績はきわめて大きい。

山本氏は周防・長門の弥生土器をA～F類の系統で整理し、1～10式に区分した。このうち前期を1～3式、中期を4～6式、後期と庄内式併行期を7～10式とした。

系統について、山本氏は長門の2式A類を立屋敷系統、周防の2式A類を下伊田式系統とした。また、阿方・片山式は長門の3式B類（高槻式※筆者注）の影響で成長したとし、D類（垂下口縁壺※筆者注）については城ノ越式（C類）系統の土器で、「阿方・片山式を吸収した須玖式の東辺ローカル」と位置づけ、5式に垂下口縁壺A類が出現し、6式にその完成形として垂下口縁壺B類（図56）が出現するとした。続いて後期の複合口縁壺をF1～4類に細分した。F1類は垂下口縁壺（山本D類）の口縁が上方に拡張されたもの、F2類は袋状口縁を祖形とするもの、F3類は鋤先口縁壺が斜T字口縁となったものである。F4類は下右田遺跡（右田・一丁田地区）A－1溝から出土した円筒状の頸部をもつもので、佐波川流域固有の「佐波型複合口縁壺」と命名した。なお、複合口縁壺の系譜については、1982年にも再論し、口縁上方拡張に最も大きな影響を与えたのは山陰・中部瀬戸内の要素で、九州の袋状口縁系壺の影響も受けているとした（山本1982）。

上記の系統について筆者の考えを述べたい。立屋敷式、下伊田式については、現在の編年観では前後の土器を含んでおり、設定に問題があったことが判明しているので対比できない（木太久1990）。ただし、山本氏の記述から立屋敷式は貝殻施文を持つ土器、下伊田式は沈線主体の瀬戸内系土器をさしていることがうかがえる。つまり、長門では豊前と共通する土器、周防では瀬戸内系土器がみられ、様相が異なる点を指摘していたことは卓見であったといえよう。阿方・片山式については、多条突帯や口縁部内面の渦巻状突帯など、高槻式には見られない特徴をもつことから、高槻式から阿方・片山式に一方的

な影響を与えていたのではなく、両者は相互に影響を与えていたと考えられる。垂下口縁壺については多条突帯・棒状、円形浮文、内面の渦巻状突帯など瀬戸内系の属性が目立つことから、A類は基本的には瀬戸内系土器であり、B類はA類をベースに遠賀川以東の須玖系土器の影響を受けたとらえている。複合口縁壺の成立については、垂下口縁壺は無関係であり、瀬戸内系長頸壺をベースとして、これに北部九州の影響を受けて成立したととらえている（田畑2012a）。なお、複合口縁壺のうち、F3類は筆者の編年観では中期中葉の土器である。F4類の「佐波型複合口縁壺」は、その後の調査でも下右田遺跡を中心に分布することが判明しており、その評価と命名は卓見であった。

次に山本氏の編年のうち、筆者の編年観と異なる土器について、主要なものを箇条書きで述べる。3式の土器は2式と同段階（前期Ⅲ－1期）及び前期末（前期Ⅲ－2期）の土器を含む。4式の宮原遺跡の壺（山本1979第14図1）は前期後葉、天王遺跡出土土器（山本1979第20図1～5）、岡山遺跡出土土器（第21図1～2）は中期中葉、大円寺山遺跡出土土器（山本1979第15図）は中期中葉～後葉に位置づけられる。6式の岡山遺跡B地点の壺（山本1979第21図12、本稿図53-11）は中期中葉、平生町日向平遺跡出土土器（山本1979第19図5）は後期前葉から中葉に位置づけられる。7式の伊倉遺跡出土土器（山本1979第44図1～4）は中期中葉から後葉、8式の伊倉遺跡出土土器（山本1979第44図6・9・10）は中期中葉から後葉、竹安遺跡の壺（前島1979）は中期中葉に位置づけられる。土井ヶ浜Ⅳ式は9・10式に二分したが、9式とされた山本1979第46図4・7は10式に相当する可能性がある。纒向2～3式併行とされた10式の土器のうち、下右田遺跡（右田・一丁田地区）A－1溝出土土器は共伴する高坏の形態から9式の吹越遺跡A－4号住居出土土器と同時期と考える。湯田楠木町遺跡出土土器は布留0～1式（纒向3～4式）併行、11式の土器は布留0～2式併行の土器が含まれる。図を見る限り、山本1981第10図1は後期後葉から終末期、第10図5は古墳時代中期の土器と考えられる。上記を含め、特に4式以降の土器に時期幅のある土器が含まれている。

山本氏は5式において、「櫛目文」が岩国市大円寺遺跡以外では使用されておらず、周防ではその流入を厳しく遮断していたとした。そして胴部に櫛描波状文を施文する垂下口縁壺A類を後期の複合口縁壺上段部にみられる波状文と同じであるとして、この土器につながる退化型式と位置づけた。一方、6式において、凹線文は周防全域で存在が認められるが、袋状口縁壺がほとんどみられないことを重視し、北部九州の勢力が本州における拠点を放棄した可能性を示唆した。

筆者の編年観では、上記の岡山遺跡の壺は前述のように中期中葉に位置づけられ、複合口縁壺の櫛描文とは関連をもたない。凹線文については、前述のように後期のものが多いことが判明している。また、袋状口縁壺は遠賀川以西系の土器であり、周防・長門では主に遠賀川以東の須玖系土器が分布するため、きわめて少量しか出土しないことが判明している。

山本氏は小田氏と同様に、須玖Ⅰ式－土井ヶ浜Ⅱ・Ⅲ式－中山Ⅳ式の併行関係を考えた。また、垂下口縁壺B類を中期末の6式に位置づけ、長門の北迫貝塚出土土器の須玖Ⅱ式の土器及び畿内のⅢ様式後半との併行関係を示し、後期初頭の7式は北部九州の高三潴式と畿内第Ⅳ様式と併行するとした。また、9式については複合口縁壺が定型化する段階で纒向1式併行とし、佐原氏、小田氏と同様に吹越遺跡A－4号住居出土土器と土井ヶ浜Ⅳ式との併行関係を示した。以後、山本氏は9式相当の土器を「吹越式」、もしくは「吹越式土器群」と呼称した。

綾羅木式土器の設定と検討（1981～1984）

伊東照雄氏は1981年に綾羅木郷遺跡の報告書において、綾羅木郷遺跡の弥生時代前期から中期前葉の土器編年を提示し（伊東編1981）、続いて1983年に北浦沿岸、現在の下関市市域を対象とした

弥生土器編年案を発表した（伊東1983）。上記のうち、前期から中期の編年は前稿（伊東1977）に基づくもので、新たに後期を加えたものである。、伊東氏は綾羅木Ⅲ式の壺について、Ⅱ式と近似し口縁部内面に貼付突帯をもつⅢ式A類、長頸化し大型品もみられるⅢ式B類に細分した。型式学的には前者から後者への移行が認められることから、Ⅲ式A類の壺とこれらに共伴する土器をⅢa（式）、同じく後者をⅢb（式）と呼称されることが多い。内折口縁土器はⅢ式[註9]及びⅣ式aに分類された。なお、後期とされた土器のうち、筆者の編年観では伊倉遺跡の壺は古墳時代前期に位置づけられる。

1983年、吉瀬勝康氏は綾羅木郷遺跡出土の弥生土器の編年案を発表した（吉瀬1983）。吉瀬氏によれば、上記の報告書刊行前に執筆されたものである。吉瀬氏は壺・甕を分類し、各型式の序列を検討して、綾羅木Ⅰ～Ⅳ期に編年した。Ⅰ期は綾羅木Ⅰ式、Ⅱ期は綾羅木Ⅱ～Ⅲa式、Ⅲ期は綾羅木Ⅲb式、Ⅳ期は綾羅木Ⅳ式に相当する。また、土井ヶ浜Ⅰ式の壺（図53－4）をⅢ期の要素を残しているが、Ⅳ期に併行するとした。

1984年、山口大学人文学部考古学研究室が刊行した『西部瀬戸内における弥生文化の研究』で、石井龍彦氏は高槻式土器についての論考を発表した（石井1984）。石井氏は壺を中心に高槻式と綾羅木式との差違を明らかにした。また、完形の良好な資料が欠如している点などから高槻式の名称の妥当性に疑問を感じるとし、綾羅木郷遺跡の名称を冠するのが適当であるとした。高槻式、綾羅木式の名称については後述する。

岡本健児氏による「柳井田・天王A式系土器」の検討（1982、1984）

1982年、岡本健児氏は伊予と周防東部における中期土器の検討を行った（岡本1982・1984）。岡本氏によれば、「柳井田・天王A式土器」という呼称は山口県の弥生土器研究者の間で生まれた名称であるという。この名称についての詳細は不明であるが、現在は使用されていない。岡本氏は「柳井田・天王A式系土器」の系譜・分布・編年等について詳細な検討を行った。岡本氏の論点は多岐にわたるが、以下では編年に関する点を中心に述べる。岡本氏は垂下口縁壺A類・B類と逆L字口縁で胴部に突帯をもつ甕を典型として「柳井田・天王A式系土器」と呼び、中期2（機内Ⅲ様式古併行）に成立するとした。また、中期2に出現する山本一朗氏分類（山本1979）の周防Ⅴ式D類（垂下口縁壺A類）は愛媛県の土居窪Ⅲ式に併行するとした。そして、中期3（機内Ⅲ様式新併行）になると、須玖Ⅱ式の鋤先口縁の影響を受けて「へ」字状口縁の壺（垂下口縁壺B類）が出現し、甕は「く」字状口縁に変化するとした。中期4（畿内Ⅳ様式併行）になると「柳井田・天王A式系土器」は消滅していくが、その要因は凹線文土器に変化していくためであるとした。

岡本氏の論考は周防と伊予の土器を詳細に比較した点で高く評価される。筆者の編年観では、中期Ⅱ－2期（畿内Ⅲ様式古併行）に周防と伊予で垂下口縁壺A類、逆L字口縁で胴部に突帯をもつ甕が出現する。周防と伊予を比較すると、「柳井田・天王A式系土器」の甕は瀬戸内一帯でみられる垂下口縁壺A類とともに分布の中心は伊予にあり、「く」字状口縁のタイプも存在する。中期Ⅲ期（畿内Ⅲ様式新併行）になると周防を中心に垂下口縁壺B類が出現する。そして、中期Ⅳ期（畿内Ⅳ様式併行）になると、伊予では搬入品を除き垂下口縁壺B類がほとんどみられなくなる。よって、「柳井田・天王A式系土器」を定義するならば、垂下口縁壺B類を指標とするのが妥当と考える。

奥正権寺遺跡における須玖Ⅱ式土器と垂下口縁壺の共伴（1984）

1984年、弥生時代中期の遺跡として知られる防府市奥正権寺遺跡の報告書が刊行され、奥正権寺遺跡第Ⅴ区SD－1で、須玖Ⅱ式土器と垂下口縁壺B類との共伴が報告された（三戸田1985）。また、垂下口縁壺が小田・佐原氏編年の第Ⅲ期にみられること、内折口縁土器は垂下口縁壺よりも新相を呈する可

能性が指摘された。

西遺跡における内折口縁土器と櫛描文施文土器の共伴（1985）

1985年、山口市西遺跡の報告書が刊行され、溝、土壙から前期末（前期Ⅲ－２期）から中期前葉の土器が多数出土した。特に第１号土壙では内折口縁壺と櫛描文の胴部片の共伴が確認された。調査を担当した菅波正人氏は前期末から中期初頭をⅠ～Ⅲ期に区分し[註10]、第1号土壙出土土器をⅡ期として、前期末から中期初頭の移行期の土器と位置づけた（菅波1986）。

吉田寛氏による吹越遺跡、湯田楠木町遺跡出土土器の検討（1985）

1985年、吉田寛氏は吹越遺跡出土土器、湯田楠木町遺跡出土土器に関する論考を相次いで発表した[註11]（吉田1985a・b）。吉田1985aでは、吹越遺跡Ａ－４号住居出土土器を標識とする土器を「吹越Ａ式」と呼び、纒向遺跡東田地区6Ａ土壙出土の複合口縁壺が周防型の搬入土器であり、「吹越Ａ式」そのものであると位置づけた。また、纒向遺跡東田地区6Ａ土壙出土土器が纒向2式に位置づけられるとして、「吹越Ａ式」の大部分を纒向2式併行とするのが妥当であるとし、「吹越Ａ式」の「小型台付鉢」（小型高坏※筆者注）との共通性も指摘した。

吹越遺跡Ａ－４号住居出土土器を明確に庄内式併行に位置づけたのは吉田氏がはじめてであり、卓見であったといえよう。一方、複合口縁壺は古墳時代前期前半まで存続するが、形態は多様であり、単体で詳細な時期を特定するのが困難である。また「吹越Ａ式」に近似した壺は周防・長門だけではなく、安芸・伊予・豊後にもみられることから、慎重な検討が求められる。

吉田1985bでは、湯田楠木町遺跡出土土器を再検討した結果、庄内式の属性と布留式の属性が認められるほか、纒向遺跡辻土壙4下層や大分県浜遺跡出土土器との共通性があり、纒向3式併行の庄内式から布留式へ展開する過渡期の様相をもつと指摘した。筆者は湯田楠木町遺跡出土土器は主に伝統的Ｖ様式系の土器と布留系の土器で構成され、時期的には布留1式（纒向4式）併行の土器が主体を占めると考えているが、吉田氏が湯田楠木町遺跡出土土器を布留式との関連で位置づけた点は卓見であった。

『山口県の考古学』の編年（1985）

1985年に出版された『山口県の考古学』で、小野忠熙氏は、弥生土器・土師器の編年について述べている（小野1985、表11）。編年は小田氏・佐原氏の編年（小田・佐原1979）と山本一朗氏の編年（山本1979、1981）を照合し、小野氏の見解を加えたものである。小野氏は弥生時代前期から終末期を第Ⅰ～Ⅵ期に区分した。Ⅰ期が山本氏の1～3式、Ⅱ期が山本氏の4式、Ⅲ期が山本氏の5・6式、Ⅳ期が山本氏の7式、Ⅴ期が8式、Ⅵ期が9～10式に相当し、土師器を含めて内容は山本氏の編年案と概ね一致している。注目したいのは、中期末に関する記述である。小野氏は岡山遺跡出土土器をⅥ期に位置づけた。また、Ⅵ期に周防部へ「櫛目文」が入り、これに対応するかのように須玖式土器が長門地方に抗体して北部九州の土器文化圏が縮小したとした。一方、周防の垂下口縁壺B類を天王式土器（柳井田式土器ともいう 図56）と呼び、この周防独自の土器文化の存在が九州圏と中・東部瀬戸内や近畿圏との土器編年の整合性を乱しており、編年の食い違いを生じた地域であったと指摘した。

筆者の編年観では、櫛描文は小野氏のⅡ～Ⅲ期に存在し、Ⅵ期にはほとんどみられない。また、須玖式土器はⅥ期に分布圏・出土量とも最大になることが判明している。後者の小野氏の発言は、周防独自の土器文化が広域編年を行う上で支障となっていたことを示すものである。

突抜遺跡の編年（1985）

1985年、渡辺一雄氏は山口市阿東町に所在する突抜遺跡・馬場遺跡の発掘調査報告書で、前期か

ら古墳時代初頭の土器編年を行い、長門北東部の地域性についても論じた（渡辺1985）。編年では、中期後半から後期中葉の遺構が僅少であったため、この段階が空白になったが、その後、羽場遺跡（乗安ほか1989）、宮ヶ久保遺跡（村岡1998）の報告書が刊行され、この地域でも土器編年の概要がつかめるようになった。

表11 『山口県の考古学』による編年（小野1985）

九州編年		山口県域弥生系赤色土器編年					近畿編年	
		文化小期		長門	周防	山本		
弥生前期	板付Ⅰ	第Ⅰ期	弥生前期				弥生前期	
	板付ⅡA			綾羅木Ⅰ	宮原	1式		第Ⅰ様式(古)
	板付ⅡB			綾羅木Ⅱ	宮原	2式		第Ⅰ様式(中)
	諸岡			綾羅木Ⅲ	宮原	3式		第Ⅰ様式(新)
弥生中期	城ノ越	第Ⅱ期	弥生中期	綾羅木Ⅳ	宮原，大円寺山 天王A	4式	弥生中期	第Ⅱ様式
	須玖Ⅰ	第Ⅲ期		土井ヶ浜Ⅱ・Ⅲ	岡山B，天王A 柳井田，天王A	5式		第Ⅲ様式(古)
	須玖Ⅱ			北迫貝塚	二ツ池	6式		第Ⅲ様式(新)
弥生後期	原ノ辻上層（高三潴）	第Ⅳ期	弥生後期	鎧	石光	7式		第Ⅳ様式
	下大隈	第Ⅴ期			天王C	8式	弥生後期	第Ⅴ様式
	西新	第Ⅵ期	弥生終末期／土師早期	土井ヶ浜Ⅳ	岡山AⅠ，吹越4	9式	第Ⅵ様式	
弥生終末期	柏田Ⅰ			秋根	老郷地 楠木町	10式		
		第Ⅶ期	土師前期	伊倉B地点 秋根3様式	朝田墳墓群Ⅰ・Ⅲ・Ⅳ地区周溝墓	11式 12式 13式		
		第Ⅷ期	土師後期	秋根 宮の馬場 坂手沖尻	上地 天王E	14式 15式 16式		
		第Ⅸ期	土師終末期	見島中学校	鋳銭司			

4．1986～2001年

山陽自動車道建設に伴う島田川流域遺跡群の調査と土器編年

1980年代に入ると、山口大学人文学部考古学研究室による弥生時代の遺跡の調査・研究が行われたほか（山口大学人文学部考古学研究室編1984）、1970年代に引き続き大規模開発が相次ぎ、大幅に資料が増加した。このうち、特筆されるのは、山陽自動車道の建設に伴い、昭和60年度から平成元年度にかけて発掘調査が行われ、かつて小野忠熙氏が調査を行った島田川流域の遺跡群が再び調査されたことである。

1990年、石井龍彦氏はこれらの調査で得られた資料をもとに、弥生時代中期から後期の編年を行い、中期（Ⅰ式）、後期（Ⅱ～Ⅳ式）、庄内式期の5段階に区分した（石井1990）。小野氏の編年以来37年を経て、島田川流域を対象に編年が行われたことになり、その意義は大きい。筆者の編年観では、中期後半とされたⅠ式（岡山遺跡出土土器）は中期中葉、Ⅰ式の搬入品とされた追迫遺跡31号出土の伊予系高坏は後期前葉に位置づけられる。Ⅲ式とされた土器のうち、追迫遺跡29号住居跡出土土器とそれ以外の土器には時期差があり、前者が後期前葉（後期Ⅰ－2期）、後者が後期後葉から終末期に位置づけられる。また、Ⅳ期とされた土器は終末期、庄内式期とされた土器は古墳時代前期（Ⅰ－1期）に位置づけられる。

一方、乗安和二三氏は周防の後期を1～4式、終末期から古墳時代初頭を庄内（古）、庄内（新）～布留の2段階に区分し（乗安1988・1989・1990a・b）、以後の編年の指針となった。ただし、筆者の編年観では2式とされた羽波遺跡SD－1、SB－8出土土器、下右田（右田一丁田）遺跡11号・14号住居出土土器と3式に位置づけられた畑岡遺跡35号段状遺構出土土器はほぼ同時期ととらえている。また、4式（後期Ⅳ）とされた吹越遺跡A-4号住居出土土器は終末期に、庄内（古）、庄内（新）～布留とされた土器は

古墳時代前期に位置づけられる。特に庄内（古）に位置づけられた叩き目を持つ伝統的Ｖ様式系の甕は、近年の資料からその大半が古墳時代初頭に位置づけられる可能性が高い。

下七見遺跡の編年（1989、1992）

1986年から1990年に圃場整備に伴い、下七見遺跡の発掘調査が行われた。下七見遺跡では、竪穴住居跡や土壙等から弥生時代前期から古墳時代前期の土器が大量に出土した。特筆されるのは内折口縁土器が多数出土したことである。特に土井ヶ浜Ｉ式に相当する大型壺に櫛描文が伴うことが明らかとなり、調査担当者の村岡和雄氏（村岡1989）、宝川昭男氏（宝川1992）によりその大半が中期前葉に位置づけられ、内折口縁土器が中期前葉に盛行することが明らかになった。また、宝川氏は下七見遺跡の弥生土器をＩ～Ⅵ期に区分した。Ｉ～Ⅱ期は綾羅木Ⅱ～Ⅲ式、Ⅲ期は内折口縁土器、Ⅳ期は須玖Ｉ式、Ｖ期は須玖Ⅱ式土器があてられている。Ⅵ期は後期から終末期とされた。以上の編年はⅥ期に細分の余地があるものの、他は筆者の編年観と概ね一致する。長門では同一遺跡で土器の変遷が確認できる遺跡が少なく、特に中期中葉から後期中葉の遺構に伴う土器が少ないため[註12]、下七見遺跡出土土器は多くが土器編年上の基準資料となっている。

延行条里遺跡の刻目突帯文土器、前期土器の検討（1990）

1990年、下條信行氏は延行条里遺跡の報告書で同遺跡出土の刻目突帯文土器、弥生土器を検討し、地点と層序をもとに、刻目突帯文土器から板付Ⅱ式a式を6段階に区分した（下條1990）。包含層資料で小片が多く時期幅もあることから、縄文から弥生への移行はなお不明確といわざるを得ないが（田畑2013b）、出土した弥生土器には綾羅木Ｉ式よりも古相を呈するものがあり、綾羅木Ｉ式よりも古い段階の土器として知られるようになった。

山本一朗氏による土器編年と伊予との関連の検討（1993）

1993年、山本一朗氏は周防西部・東部別に弥生時代前期から中期初頭を1～4式に区分する土器編年案を発表した（山本1993a）。西部の1式に小路遺跡出土土器をあて、以後の2～4式は山本1979・1981の1～3式相当の土器をあてた。また、2式は綾羅木Ｉ・Ⅱ式、3式（a・bに細分）は綾羅木Ⅲ式に併行するとした。一方、山本氏は宮原遺跡出土土器には2式（山本1979・1981の1式）に相当する土器が少なく、大半が3・4式に相当すると見解を変更した。西部の4式については、西遺跡第1号土壙で内折口縁壺と櫛描文を施文する甕が共伴することから、綾羅木Ⅳ式に併行する中期初頭に位置づけた。

西遺跡1号土壙出土土器の位置づけは卓見であったが、筆者の編年観では、周防西部・東部の2式は一部の壺を除くと、3式に位置づけられる。また、周防西部の3式はほとんどが3式aに位置づけられるが、3式bに相当する土器が提示されていない。一方、周防東部の4式は3式に位置づけられると考えている。

同年、山本氏は周防の弥生時代後期の土器編年を行った（山本1993b）。岡山遺跡出土土器を中期末から後期初頭に位置づけ、後期を前葉、中葉、後葉、庄内式併行期を移行期として、各々古・新の2段階に細分した。後期前葉は複合口縁壺が定型化していない段階で、後期中葉は複合口縁壺の完成期、後期後葉は複合口縁壺が増加し、大型器台が出現するとしている点は筆者の編年観と一致する。

しかし、筆者の編年観では岡山遺跡出土土器は中期中葉であり、後期前葉古段階とされた円光寺遺跡第4号土壙の壺（山本1993第33図1）と後期前葉新段階とされた追迫遺跡第29号住居跡の壺（山本1993第34図20）は前者が古く後者が新しいが同段階でとらえている。後期中葉古段階と新段階については同段階でとらえており、後期前葉新段階とされた四割遺跡2号住居出土土器、天王遺跡18・19・20号住居出土土器については後期後葉に位置づけられる。また、後期中葉古段階とされた追迫遺跡2号住居

出土土器は終末期、22・39号住居出土土器は後期後葉に位置づけられる。

後期後葉古段階には清水遺跡出土土器、新段階には吹越遺跡A-4号住居出土土器があてられ、一部庄内式に併行することが提示されたが、この点については後述する。移行期古段階とされた土器には終末期から古墳時代前期前半の土器が含まれている。また、庄内式新段階とされた土器のうち、湯田楠木町遺跡出土土器は、前述のように主体は布留1式併行の土器と考えている。

同年、山本一朗氏は周防と伊予の弥生土器の関連を考察した論考を発表した（山本1993c）。前期の土器について、阿方式壺の指頭圧痕は綾羅木式の属性では説明できないとしたが、いわゆる逆L字状口縁の甕は北部九州の影響を受けたとした。中期の土器については、松山市祝谷六丁場遺跡出土土器と比較し、甕において周防の無文化傾向が目立つこと、垂下口縁壺B類の分布が周防に重心が偏ることを指摘した。また、下條信行氏の論考（下條1991）を受けて、山本1979・1981を変更し、周防が凹線文を拒絶的に対応したとした。一方、壺・甕の突帯上の指頭押捺文が松山平野から周防が受けた顕著な属性であることを指摘した。後期の複合口縁壺の系譜については、「北部九州・山陰を含めた瀬戸内一帯の中期末から後期初頭の時期に、大形広口壺の口縁を上方に拡張する風潮があって、瀬戸内西部の両岸でほぼ同時に、その影響をうけたというのが実状であろうか」とした。後期中葉については周防と伊予の土器が近似しているとし、後期後葉は資料の量的な差から、有効な比較が困難であるとした。また、吹越遺跡A－4号住居出土土器を庄内式の古い段階に位置づけた。そしてこの時期を過ぎると周防では畿内系土器がみられるようになるが、それらは庄内式ではなくV様式系の土器と布留式傾向を示す土器であると指摘した。

上記について筆者の考えを述べたい。阿方式にみられるいわゆる瀬戸内甕は瀬戸内で系譜が追えるため、北部九州の影響を受けたとは考えられない。甕については山本氏が指摘するように須玖系土器の影響で無文の甕が多いが、口縁部下に押捺を施す突帯を持つ甕は中期末（中期Ⅳ期）まで一定量存在する。垂下口縁壺B類の分布が周防に偏ることは認められるが、近年の資料では中期末の土器にも凹線文土器、及びその影響を受けた土器がみられることが判明している（石川編2013）。後期土器については、伊予と周防では近似している点、異なる点が明らかになりつつあり（田畑2012a）、今後検討を進める必要がある。吹越遺跡A-4号住居出土土器の位置づけや畿内系土器については、筆者もほぼ同じ見解をもつ。

中村友博氏による「柳井田式」の設定（1993）

1993年、中村友博氏は中期の壺に関する論考を発表した（中村1993）。中村氏は岩国市柳井田から出土した完形の壺を先述した小野忠熙氏の命名（小野1985）に基づいて「柳井田式の壺」(図56)とし、「外反した口縁の反転した斜め下方の鍔状端面に鋸歯紋を飾り、頸ないし胴に水平隆帯を貼る壺形土器」と定義した。筆者は、壺の口縁の垂下は「柳井田式の壺」よりも古い段階から存在する属性であることを重視し、「柳井田式の壺」を含めた全体を垂下口縁壺と呼称するのが適切と考えている。以上から、中期中葉以前のものを垂下口縁壺A類、「柳井田式の壺」に相当する後者を垂下口縁壺B類と呼称する立場をとる。

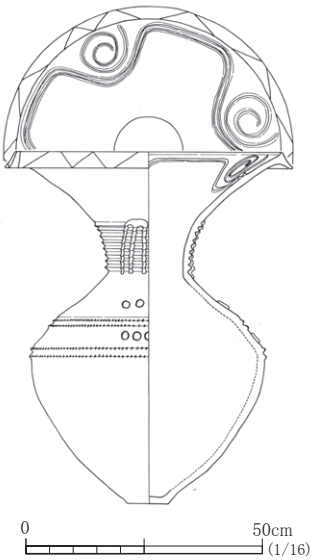

図56　「柳井田式」の壺（山本1979）

中村氏は柳井田式の壺の細別、祖型、存続期間、併行関係について検討を行った。細別については問題を残したが、柳井田式が凹線紋土器と須玖Ⅱ式に同時性があると指摘した点は卓見であった。

豆谷和之氏による前期・中期の土器の検討（1993、1995）

1993年、豆谷和之氏は吉田遺跡第Ⅰ地区A区の「不整形のピット」出土土器を報告し、須玖Ⅱ式併行期の土器様相を明らかにした（豆谷1993）。同時に豆谷氏は垂下口縁壺の変遷、併行関係を検討し、その出現期が畿内第Ⅲ様式の前半、盛行期が第Ⅲ様式の後半、衰退期が畿内Ⅳ様式に併行するとした。筆者の編年観では、出現期はもう1段階遡る。また、豆谷氏が衰退期とした土器は、中期中葉から後葉に位置づけられる。その後 1995年に豆谷氏は乗安氏の編年（乗安1995）を受けて、垂下口縁壺の変遷案を撤回するとともに、山口市小路遺跡12号溝出土土器を再検討し、同溝出土土器が本州最古級の弥生土器であることを明らかにした（豆谷1995）。

乗安和二三氏による前期・中期土器の編年（1995、1996、2000）

1995年、乗安和二三氏は周防の中期土器をⅠ～Ⅳ期に区分する編年案を発表した（乗安1995）。Ⅰ期は内折口縁土器や櫛描文が出現する中期前葉にあたる。Ⅱ期はそれまでの編年で中期末とされた土器、すなわち口縁部・胴部に櫛描文を施文する垂下口縁壺A類とこれらに伴う土器があてられた。Ⅲ期は垂下口縁壺B類が出現する段階で、筆者の編年観で須玖Ⅰ式新段階～須玖Ⅱ式古段階に伴う土器があてられ、Ⅳ期は須玖Ⅱ式新段階に伴う土器があてられた。この編年案では遺構出土土器を一括して同時期に認定しているため、一部で前後段階の土器がみられるなどの問題はあるが（田畑2006c）、その後の編年の指針となった。

1996年、乗安和二三氏は山口考古学談話会百回記念大会「西部瀬戸内の弥生文化～前期弥生土器の諸相～」で、周防・長門における前期土器の編年を行った（乗安1996）。また、2000年には近藤喬一氏と長門における前期土器の編年を行い（近藤・乗安2000）、前期Ⅰ、Ⅱ－a、Ⅱ－bo、Ⅱ－bn、Ⅲ－a、Ⅲ－bの6段階に区分した。[註13] Ⅰ期は綾羅木Ⅰ式に先行する段階で延行条里遺跡出土土器があてられた。長門ではⅡ－a期に綾羅木郷遺跡EⅢ地区L.N9出土土器、Ⅱ－bo期にEⅢ地区L.N9出土土器を除く綾羅木Ⅰ式土器、Ⅱ－bn期に綾羅木Ⅱ式土器、Ⅲ－a期に綾羅木Ⅲ式a、Ⅲ－b期に綾羅木Ⅲ式bに相当する土器があてられた。周防では、Ⅰ期に小路遺跡12号溝出土土器があてられたが、Ⅱ－a、Ⅱ－bo期に該当する土器はなく、Ⅱ－bn期に下東遺跡YD-1、YP-14出土土器があてられ、Ⅲ－a期に下東遺跡YP28、下東遺跡8号土壙、宮原遺跡土壙22出土土器等、Ⅲ－b期に下東遺跡YP34、宮原遺跡土壙16出土土器等があてられた。

上記の編年について、筆者の編年観では前期Ⅰとされた延行条里出土土器は甕（乗安1996編年表4）を除き、Ⅱ－a期までの時期幅でとらえられる。Ⅱ－bo、Ⅱ－bn期については、後者の壺の口縁部内面に沈線がみられること以外に型式学的な違いがないことから、同一段階でとらえるべきだと考えている。また、Ⅲ－b期に位置づけられている内折口縁土器（乗安1996編年表107・108）は中期前葉に位置づけられる。周防の編年では、Ⅲ－a期に位置づけられている宮原遺跡第Ⅰ環溝Ⅴ層出土の壺（乗安1996編年表62）は次段階に位置づけられるが、他は概ね妥当と考えられる。

吉瀬勝康氏による後期から終末期の編年（1996）

1996年、吉瀬勝康氏は周防・長門における弥生時代後期から終末期の土器編年案を発表した（吉瀬1996）。吉瀬氏は①基準となる良好な資料の絶対量の不足、②水系や平野単位で後期をとおして変遷をたどれる資料がない、③前・中期に比べ器種の多様な展開と他地域からの影響を受けて複雑な構成をなしているとして、編年が難しい状態にあると指摘した。このため、編年では3時期に大別するにとどめ、Ⅰ期を後期土器が出現する段階、Ⅱ期をⅠ期とⅢ期の間に位置づけられる段階、Ⅲ期を庄内式併行期とした。また、山口県内の様相は①県西部の下関から宇部そして日本海響灘沿岸萩辺りまでの地

域、②瀬戸内側中央部山口、防府市を中心とした地域、③阿東町から島根に抜ける内陸から東北部地域、④瀬戸内側の東部、熊毛・玖珂・柳井・平生・岩国といった県東南部地域に地域性がみられるとした。

筆者の編年観では、後期Ⅰ～Ⅱ期とされた清水遺跡出土土器は吉瀬氏のⅡ～Ⅲ期、後期Ⅲ期とされた下七見遺跡第2地区SD2出土土器は古墳時代前期前半に位置づけられる。

下右田遺跡の編年（1999）

1999年、原田光朗氏は下右田遺跡の発掘調査概報で前期から古墳時代前期までの編年を提示した（原田1999）。筆者の編年観では後期後半とされたSD240出土土器は終末期に位置づけられる。その他の土器の位置づけについては田畑2004・2012aを参照されたい。

乗安和二三氏による後期土器の編年（1999）

1999年、乗安和二三氏は長門における後期の土器編年案を発表した（乗安1999）。編年では後期をⅠ～Ⅳ期に区分し、庄内式併行（古）までを提示した。Ⅰ期は良好な資料に欠けるため、柳瀬遺跡包含層出土土器等があてられた。以下、Ⅱ期に船頭遺跡（Ⅱ）SD24出土土器、Ⅲ期に船頭遺跡SK18出土土器、下七見遺跡（Ⅱ）SB1出土土器、Ⅳ期に柳瀬遺跡LS001出土土器、下七見遺跡（Ⅱ）SB6出土土器等があてられ、庄内式併行（古）に、土井ヶ浜Ⅳ式の土器、吉永遺跡（Ⅱ）SB6出土土器等があてられた。また、編年では、柳瀬遺跡出土土器で示された逆「く」字口縁[註14]の高坏の変遷（濱﨑1997）が適用され、以後の編年の指針となった。筆者の編年観ではⅣ期、庄内式併行（古）については、各々1段階下げて位置づけている。

石井龍彦氏による長門西部の後期後半から古墳時代初頭の土器編年（2000）

2000年、石井龍彦氏は長門西部における後期後半から古墳時代初頭の土器を4期8段階に区分する編年案を発表し（石井2000）、Ⅰ～Ⅱ期を後期末、Ⅲ期を庄内式併行期、Ⅳ期を布留式土器併行とした。Ⅰa期は乗安氏編年（乗安1999）のⅡ期、Ⅰb期はⅢ期に相当する。Ⅱ期には下七見遺跡第12地区SB5出土土器をあてた。Ⅲa期は乗安氏編年のⅣ期、Ⅲb期は乗安氏編年の庄内式併行（古）に相当する。Ⅳa期には吉永遺跡Ⅲ－東地区SB3出土土器、SB5出土土器、Ⅳb期には柳瀬遺跡E地区LS005出土土器、Ⅳc期には下七見遺跡第2地区SD2出土土器をあてた。

石井氏のⅡ期は乗安氏編年のⅡ期とⅢ期の高坏の形態にヒアタスを認めて設定したものと推測され、高坏（石井2000第12図37）がそれに相当する。しかし、下七見遺跡第12地区SB5からは石井2000第12図36のように口縁部が長くなり、屈曲が緩くなるものも共伴していることから、筆者はやや時期幅のある資料と考えている。また、Ⅲ－a期、Ⅲ－b期については、後者の高坏の口縁部がやや長いが、屈曲度はほぼ同じであることから、筆者は同じ段階でとらえている。このほか、筆者と位置づけが異なるのはⅣa期とⅣb期である。筆者はⅣb期の高坏（石井2000第12図83）はⅢb期の高坏（石井2000第12図54）の直後に位置づけられると考え、終末期最新相の土器ととらえている。一方、Ⅳa期の吉永遺跡Ⅲ－東地区SB5出土土器には布留系甕（石井2000第12図62）がみられること、伝統的Ⅴ様式系の甕が平底である点から古墳時代初頭の土器ととらえている。下七見遺跡SD2出土土器はやや時期幅をもつが、吉永遺跡Ⅲ－東地区SB5出土土器よりは一段階新しい土器が主体を占めるので、相対的な位置づけに異存はない。

沖田遺跡の編年（2000、2001）

2000年、古庄浩明氏は角島・沖田遺跡の報告で出土した刻目突帯文土器、前期の土器を綾羅木郷遺跡の編年に準じて区分する編年案を発表し（古庄2000）、翌年これを補足した（古庄2001）。出土土器は遺構に伴わないが、刻目突帯文土器、初期遠賀川式土器がまとまって出土したことが注目された。

筆者による土器編年（2001）

2001年、筆者は山口市上東遺跡出土土器を検討したほか、上東遺跡と周辺遺跡を含めた前期後葉から中期後葉の土器編年案を発表した（田畑2001a）。この報告書では内折口縁を「内接口縁」と誤記しており、関係各位にご迷惑をおかけしたことを深くお詫びする。

同年、筆者は長門市湯免遺跡出土の壺を標識とし、主に長門北部に分布する湯免式壺（柿本1979）を集成・検討し、前期後葉から中期中葉まで存在することを提示した（田畑2001b）。

同年、筆者は周防・長門における弥生時代後期後葉から古墳時代初頭の土器編年案を発表した（田畑2001c）。編年では長門西部と周防西部について、後期末から古墳時代前期前半までを4段階に区分し、高坏の形態を軸に周防と長門の併行関係を示した。内容については後述する。

5．2002年～現在

『考古資料大観』における後期から古墳時代前期の編年（2002）

2002年、大久保徹也氏は中国・四国地方の弥生時代後期から古墳時代前期の土器を概説し、広域編年を提示した（大久保2002）。編年では後期から終末期を4段階、古墳時代前期を4段階に区分した。周防・長門は防長として一括され、後期1に円光寺遺跡4号土坑出土土器、後期3に清水遺跡第1・2環濠出土土器、古墳1期に下七見遺跡第2地区SD2出土土器があてられた。筆者の編年観でも上記は概ね妥当な位置づけと考えられる。

筆者による前期土器の検討（2003）

2003年、筆者は角島・沖田遺跡出土の刻目突帯文土器、弥生土器を再検討した。沖田遺跡では遺構に伴う土器はないものの、板付Ｉb式に位置づけられる長門で最古段階の弥生土器がまとまってみられること、これらの土器が福岡県宗像地域の土器と近似していることを指摘した（田畑2003a）

同年、筆者は山陰地方における綾羅木系土器について検討する際、長門西部における弥生時代前期から中期初頭の壺の編年を行った（田畑2003b）。

山本一朗氏による「吹越式」の再検討（2003、2005）

2003、2005年、山本一朗氏は「吹越式」に関する論考を発表した（山本2003、2005）。山本2003は山本2005の欠を補うために執筆したという（山本2003）。山本氏は（1）後期後葉、（2）終末期（庄内式併行）前半、（3）終末期（庄内式併行）後半、（4）古墳時代初頭、（5）古墳時代前葉の編年を行った。また、前稿の位置づけを1段階引き下げ、後期後葉に畑岡遺跡35号段状遺構出土土器、終末期（庄内式併行）前半に清水遺跡出土土器、終末期（庄内式併行）後半に松尾遺跡1号住居出土土器をあてた。そして古墳時代初頭に吹越遺跡Ａ－４号住居出土土器、古墳時代前葉に林遺跡SB1・SB3、吉政遺跡SB6出土土器をあてた。

山本氏は吹越遺跡Ａ－４号住居出土土器を古墳時代初頭に位置づけを変更した理由として、以下の点を理由に挙げた。

①周防（東南部※筆者注）では吹越遺跡調査後に出土した後期土器のほとんどが「吹越式」（複合口縁壺が定型化した段階以後の土器 ※筆者注）の範疇に属しており、その量の多さから「吹越式」といわれる土器群は相当な時間幅をもっていると考えられること

②この地域では布留式前葉の土器がほとんどみられない

③吹越遺跡では、Ａ－４号住居出土土器以外にも、後出的要素の強いものを含んでいること

④田布施町大崩遺跡では、複合口縁をもつ平底の壺に丸底の壺が被さる土器棺が出土し、下膨れ体

部の甕や、粗製化した口縁部の長い小型の甕を伴っており、上記が布留式前葉の土器と考えられること

⑤纒向4式には「防長型複合口縁壺」があり、布留1式に編年されていること

山本氏は吹越遺跡A－4号住居出土土器を古墳時代初頭ととらえることで、この地域における初期布留式土器の欠落という難問を解決できるとした。

上記について筆者の考えを述べたい。①については、出土量の多さが時期幅に比例するとは必ずしも言えない。②について、布留式前葉の土器が少ないのは事実であるが、これは遺構に伴うまとまった土器の報告例が少ないためであり、実際にほとんどみられないとは言えない。③・④については、基本的には弥生時代終末期におさまる特徴である。⑤について、纒向4式で防長型とされている複合口縁壺は、その形態から「防長型複合口縁壺」ではないと考えられる。以上から、筆者は吹越遺跡A－4号住居出土土器については、周防東部の土器変遷を踏まえ、弥生時代終末期前半に位置づける（田畑2012a）

筆者の編年観では、畑岡遺跡35号段状遺構は後期中葉、清水遺跡出土土器は後期後葉から終末期前半、松尾遺跡1号住居出土土器は終末期前半から後半に位置づけられる。また、古墳時代前葉とされた土器のうち、林遺跡SB1出土土器は後期後半から終末期、吉政遺跡SB06出土土器は終末期後半に位置づけられる。

梅木謙一氏による『考古資料大観』の編年と伊予系高坏の検討（2003、2004）

2003年、梅木謙一氏は中国・四国地方の弥生時代前期から中期末の土器を概説し、広域編年を提示した（梅木2003）。編年では前期前半、前期後半、中期前葉、中期中葉、中期後葉の5段階に区分した。編年図では周防・長門は一括されている。このうち、前期前半から中期前葉までは綾羅木郷遺跡出土土器、中期中葉は綾羅木郷遺跡と下東遺跡出土土器、中期後葉は下東遺跡出土土器が図示されている。筆者の編年観では、前期前半とされた綾羅木郷遺跡RⅣ地区L.N.5420出土土器は梅木氏の前期後半、中期中葉とされた綾羅木郷遺跡GⅡ地区L.N.5611出土土器は中期前葉に位置づけられる。

2004年、梅木謙一氏は、周防の伊予系高坏を集成し、周防の伊予系高坏には伊予からの搬入品、周防で模倣されたもの、その他に者に区別されることから、中期後半には主に搬入が、後期前葉には手法の移動があったことを想定した（梅木2004b）。また、伊予との比較から、明地遺跡SK1出土土器を伊予の第Ⅳ様式期（中期Ⅲ）、中院遺跡SD1出土土器を第Ⅴ－1様式期（後期Ⅰ）に位置づけた。一方、梅木氏は伊予系高坏の類似品が下右田遺跡で出土していることから、伊予系土器の分布が防府市域にまで分布することを示唆したが、その後、真尾猪ノ山遺跡で搬入品とみられる伊予系高坏が出土し（谷口・山本2011）、梅木氏の想定が裏付けられた。伊予系高坏は周防と伊予との併行関係を探る鍵となる土器であり、梅木氏の論考はきわめて重要な意味をもつ。

筆者による中期土器の編年と併行関係の検討（2004）

2004年、筆者は、第53回埋蔵文化財研究集会で田畑2001aに基づき、周防西部における中期の土器を中期Ⅰ～Ⅳに区分する編年案を発表し、長門及び北部九州、伊予中部との併行関係を提示した（田畑2004）。また、須玖Ⅰ式中段階に併行する中期Ⅱは細分できること、その後半段階にあたる岡山遺跡38号土壙・環濠出土土器、河池遺跡貯蔵穴下層出土土器は、壺の形態・文様の近似性から安芸の中山Ⅳ式に併行するとした。また、垂下口縁壺B類を中期Ⅲ～Ⅳに位置づけた。

筆者の編年案に対して、九州の研究者から中期Ⅳには高三潴式が含まれるのではないかとの指摘があり、中国・四国の研究者からは中期Ⅲの時期を伊予の中期Ⅲ、安芸のⅣ－2様式の一部にまで引き下げる案が提示された(梅木2004a)。前者については、編年表で中期Ⅳは高三潴式古段階の一部を含む

ことを提示していたが、指摘を受け、再検討した結果、高三潴式古段階までの土器を含むものと認識を改めている。一方で、周防・長門の須玖式土器と直接の関わりをもつ東北部九州では細分が進んでいないことから、詳細については今後の検討が必要と考える。後者の指摘は文京遺跡SK－1における垂下口縁壺B類と伊予型高坏の共伴が根拠と推測される。この資料について、筆者は垂下口縁壺の時期を詳細に確定させることは困難と判断し、中期Ⅲ～Ⅳに位置づけた。周防の中期Ⅲは須玖Ⅰ式新段階～須玖Ⅱ式古段階に併行する土器である。一方、伊予の中期Ⅲ、安芸のⅣ－2様式は須玖Ⅱ式新段階に併行するとされるため、文京遺跡SK－1出土土器を伊予の中期Ⅲ、安芸のⅣ－2様式併行とするならば、周防の中期Ⅲを引き下げるのではなく、中期Ⅳに併行させるべきである。また、文京遺跡SK－1出土の垂下口縁壺B類にみられる棒状浮文は、中国・四国地方では須玖Ⅰ式新段階～須玖Ⅱ式古段階に併行すると考えられる安芸のⅢ－2様式、伊予の中期Ⅱ新、東予のⅣ－1様式には存在するが（柴田2004）、これより後にはみられない。周防においても確実に中期Ⅳに位置づけられる垂下口縁壺B類に棒状浮文はみられない。

改めてSK－1出土土器をみると、共伴した伊予型高坏は透かし穴が貫通するタイプであることから、伊予の中期Ⅲでも古相に位置づけられる。また、垂下口縁壺B類は口縁部が欠損した大型壺で、同破片も出土していないことから、周防の中期Ⅲの壺が2次的に使用された可能性がある。本稿では、遺構における共伴関係を重視して文京遺跡SK－1出土土器を周防の中期Ⅳと併行とし、棒状浮文が少量残存するものとしておきたいが、今後の資料による検証を待ちたい。以上から伊予・安芸との併行関係については田畑2004を変更する必要はないと考えている。

石井龍彦氏による周防の中期末から終末期の土器編年（2004）

2004年、石井龍彦氏は周防の中期末から終末期までの土器編年案を発表した（石井2004a・b）。石井氏は、後期をⅤ－1～3期に区分して、各々を古・新に細分し、終末期はⅤ－4期とした。各時期の基準資料を箇条書きで述べる。中期末の基準資料は中院遺跡SD1出土土器、Ⅴ－1期古相の基準資料は円光寺遺跡第4号土壙、石光遺跡第Ⅰ地区包含層、下右田遺跡SK990出土土器、Ⅴ－1期新相の基準資料は、明地遺跡SB32、郷遺跡Ⅲ地区SB302出土土器である。Ⅴ－2期古相の基準資料は、追迫遺跡2号住居跡、22号住居跡、29号住居跡、下右田遺跡13次SD221出土土器、Ⅴ－2期新相の基準資料は、下右田遺跡17次SI1030、吉田遺跡本部2号館1号土壙、畑岡遺跡35号段状遺構、下右田遺跡SD260、天王遺跡17号住居出土土器である。Ⅴ－3期古相の基準資料は、畑岡遺跡22号、29号段状遺構、四割遺跡2号竪穴住居跡出土土器、Ⅴ－3期新相の基準資料は、清水遺跡2号、12号住居跡、9号段状遺構、6号土壙出土土器である。Ⅴ－4期の基準資料は吹越遺跡A－4号住居、松尾遺跡1号竪穴住居跡、林遺跡SB6、岡山遺跡第Ⅱ地区第1号台状墓出土土器である。

石井氏が中期末とした中院遺跡SD1出土土器は、前述した伊予系高坏の特徴から後期前葉（後期Ⅰ－1期）に位置づけられる。Ⅴ－1期は簡素な複合口縁壺が成立する段階とされる。古相と新相を比較すると、後者が新相を呈するが、同一段階でとらえるのが妥当と考える。Ⅴ－2期は複合口縁壺が成熟し、口縁部形態が多様化するともに、施文パターンが確立される段階とされる。しかし、筆者の編年観では、古相のうち、追迫遺跡2号住居出土土器は共伴する高坏の特徴から終末期、追迫遺跡22号住居跡出土土器は器台の特徴から後期後葉、同遺跡29号住居跡出土土器は複合口縁壺の立ち上がりが小さく定型化していないので、Ⅴ－1期、筆者編年の後期Ⅰ－2期に位置づけている。また、下右田遺跡13次SD221出土土器は壺の特徴から、筆者編年の後期Ⅰ－2期に位置づけている。この段階から筒部の中央が膨らむ大型器台が出現するとされるが、共伴関係の分かる土器及び西部瀬戸内全体の状況

（松村2008）からその出現は後期後葉とみるべきであろう。また、高坏については、口縁部が逆「く」字形のものと畑岡遺跡・清水遺跡等でみられる口縁部に段をもち屈曲するタイプ（石井2004第12図119・125・135・139・144）は別系譜でとらえるべきだと考えている。Ⅴ－2期新相については、畑岡遺跡35号段状遺構出土土器以外、底部の形態や高坏の特徴などから後期後葉から終末期に位置づけられる。なお、清水遺跡6号土坑出土土器を除くⅤ－3～Ⅴ－4期の相対的な位置づけは筆者と同じであるが、筆者は壺・甕の底部形態等から、Ⅴ－3期新相から終末期に位置づけている。

筆者による長門の土器編年（2006）

2006年、筆者は長門西部における弥生土器編年の概要を発表し（田畑2006a）、同年、長門北東部における中期の土器編年案を発表した（田畑2006b）。いずれも内容は田畑2004に準拠している。

小南裕一氏による前期から中期初頭の編年（2008）

2008年、小南裕一氏は長門西部における弥生文化成立期の集落様相を検討する際に、前期から中期初頭の土器編年案を提示した（小南2008）。編年案では前期をⅠ～Ⅴ、中期初頭を中期Ⅰに区分した。この編年案は田畑2003a・b、2006bとほぼ一致する。

『講座日本の考古学』の編年（2011）

2011年、柴田昌児氏は中国・四国西部地域の弥生文化を概説した際、広域編年を提示した。編年では、前期をⅠ－1～3様式、中期をⅡ－1～Ⅳ－3様式、後期をⅤ－1～4様式、庄内式併行期をⅥ様式、古墳時代初頭を布留0・前期1に区分した（柴田2011）。編年表では周防・長門は一括され、具体的な説明はないものの、遺構名が提示されている。

柴田氏の編年では主に周防の土器が使用されているが、Ⅰ－2期、Ⅴ－2期、Ⅵ期、布留0・前期1では、長門の土器が使用されている。注目されるのは、Ⅳ－1～3期である。Ⅳ－1期とされた小谷遺跡SB03出土土器は、田畑2004では中期Ⅲ～Ⅳに位置づけた。甕をみると胴部の張らないものが主体を占めるが、詳細な時期比定は困難と考えている。Ⅳ－2期とされた下東遺跡（Ⅱ）1号溝状遺構出土土器、小谷遺跡SB05は中期Ⅳに位置づけた。また、Ⅳ－3期とされた土器のうち、小谷遺跡SB10・19出土土器は田畑2004の中期Ⅳに、中院遺跡SD1出土土器は前述の理由から後期Ⅰ－1期に位置づけている。小谷遺跡SB10・19出土土器は田畑2004の発表後に公表された明地遺跡SK1出土土器（梅木2004b）、開明遺跡SI10出土土器（石川編2013）と比較すると、口縁部が短く、肩部～胴部中位が張りだす甕が主体を占める。ただし、中院遺跡SD1出土の甕にみられるような肩部が強く張る甕が存在せず、共伴する須玖系土器が須玖Ⅱ式新段階～高三潴式古段階の幅でとらえられる。以上から、周防東部では中期Ⅳ（田畑2004）を細分し、明地遺跡SK1出土土器、開明遺跡SI10出土土器を中期Ⅳ－1期、小谷遺跡SB10・19出土土器を中期Ⅳ－2期に位置づけたい。この他、Ⅴ－4期とされた吹越遺跡A－4号住居出土土器は高坏の形態からⅥ期に位置づけられる。

筆者による周防の後期から古墳時代初頭の土器編年（2012）

2012年、筆者は周防西部・東部における弥生時代後期から古墳時代初頭の土器編年案を発表した（田畑2012a）。編年では周防西部・東部について、後期から古墳時代初頭までを7段階に区分した。後期Ⅰ－1期は中院遺跡SD1出土土器、特に伊予系高坏の特徴から、中予地域の後期Ⅰ－1期に併行する段階である。後期Ⅰ－2期は複合口縁壺の出現期で円光寺遺跡4号土壙出土土器に代表される。後期Ⅱ－1期は複合口縁壺が定型化する段階で、畑岡遺跡35号段状遺構出土土器に代表される。後期Ⅱ－2期は、複合口縁壺の頸部における沈線が激減・消失し、袋状口縁壺、大型器台が出現する段階である。時期幅をもつが清水遺跡第1・2環濠出土土器等に代表される。終末期Ⅰ期は、壺・甕の丸底

化が進行し、周防西部で角状突起を持つ支脚が出現する段階である。高坏は北九州の高島式に近似した形態をもつ。終末期Ⅱ期は壺・甕の丸底化がさらに進行し、高坏坏部の屈曲が失われる段階である。古墳時代前期Ⅰ期は布留系土器、伝統的Ⅴ様式系を中心とする畿内系土器が出現する段階である。

筆者は前稿（田畑2001c）で、高坏の口縁部が時期が下るにつれて長くなることを重視してきた。しかし、終末期Ⅱ期に位置づけられる山口市朝田墳墓群Ⅷ地区SK9（小南編2009）からは、口縁部が長いもの（田畑2012a図118－11・12）とともに、短い口縁部を持つが、屈曲が緩やかで直線的に外反するもの（田畑2012a図6－9・10）が出土した。以上から、前述した傾向はあるものの、高杯の口縁部が全て長くなるわけではなく、屈曲が失われていくことが重要な指標になることが判明した。また、吉田遺跡本部2号館第1号土壙出土土器は終末期前半の土器を主体とする豊前の高島式土器[註15]と近似していることが判明した。そこで、上記の変遷観に基づき、前稿で後期末に位置づけた吉田遺跡本部2号館出土土器は終末期Ⅰ期を主体とする土器と位置づけを変更した。また、前稿で終末期Ⅰ期に位置づけた防府市下右田遺跡SD240出土土器については、終末期Ⅰ～Ⅱ期の時間幅を持つ資料ととらえ、下関市柳瀬遺跡D地区LS001出土土器（濱崎1997）、下関市吉永遺跡Ⅲ－東地区SB－6出土土器（西田ほか1999）については終末期Ⅱ期に位置づけを変更した。古墳時代前期の土器については後述する。

蒲原宏行氏による広域編年（2013）

2013年、蒲原宏行氏は九州から近畿地方までを対象とした弥生土器の併行関係についての論考を発表し（蒲原2013）、既発表の旧国単位の編年案を調整した広域編年表を提示した。周防・長門関連では、長門の前期が綾羅木郷遺跡の編年、周防の前期が山本一朗氏の編年（山本1993a）、中期から後期初頭は筆者の編年（田畑2004）、後期中葉から終末は石井龍彦氏の編年（石井2000・2004b）が使用されている。前期、後期から終末期の編年については、前述した編年観の違いがあるため評価は難しい。中期については、蒲原氏が須玖Ⅱ式古段階を中期Ⅳ併行としている点が異なるが、他は概ね妥当と考えられる。

筆者による長門の前期から中期土器の編年（2013）

2013年、筆者は田畑2006bに基づき、長門西部における弥生時代前期から中期後葉の土器編年の概要を提示した。また、九州の高槻式土器、綾羅木式を含めた土器について、綾羅木・高槻系土器と呼称することを提唱した（田畑2013a）。

6．現在に至る編年研究のまとめ

前章では年代をおって、各時代の編年案について述べてきた。1950年代に本格的な編年研究がはじまり、周防では小野忠熙氏による島田川流域の編年（小野1953b）、長門では小田富士雄氏による下関市域の編年（小田1957）が提示された。1960年代になると土井ヶ浜Ⅰ～Ⅳ式が設定され（金関・坪井・金関1961）、中野一人氏によりはじめて周防・長門全域を対象とした編年が行われた（中野1962）。続いて、『弥生式土器集成』の編年（金関1964）、『日本の考古学Ⅲ』の編年（潮見・藤田1966）が提示された。特に『日本の考古学Ⅲ』の編年は当時の研究の到達点を示す内容で、その後に大きな影響を与えた。しかし、上記の編年はいずれも資料不足により、不明確な内容とならざるを得なかった。特に周防の中期の土器については、土器様相の独自性は認識されていたが、畿内に準じた変遷が想定されたこともその要因であった。

その後、1970年代の大規模開発に伴う発掘調査による資料の増加を経て、『高地性集落跡の研究資料篇』で佐原真氏、小田富士雄氏によって編年と併行関係が検討された（佐原・小田1979、小田1979）。

また、山本一朗氏による編年（山本1979・1981）が提示され、その後の研究に大きな影響を与えた。この頃、長門では綾羅木郷遺跡における編年の概要が提示されたが（伊東1974・1977）、中期土器は豊前と様相が近似していたので、土井ヶ浜Ⅰ～Ⅲ式の併行関係に問題はあったものの、前期から中期の土器編年の流れに大きな問題はなかった。しかし、周防では、資料が増加したとはいえ、中期前葉、中期末（中期Ⅳ）の資料が少なかった関係上、櫛描文、凹線文を施文する土器も僅少であったことから[註16]畿内編年が適用できず（山本1996）、土器様相の把握が困難であった。これに関連して、現在中期中葉に位置づけられる櫛描文を施文した垂下口縁壺A類を後期の複合口縁壺にみられる櫛描文と関連づけて中期末に位置づけたことは（山本1979・1981、小野1985等）、原ノ辻上層式（高三潴式）を畿内のⅣ様式に併行させる当時の編年観と合わせて、中期の位置づけに問題を残し、その解消は1990年代後半にまで持ち越された。

1980年代になると綾羅木郷遺跡の報告書刊行により、綾羅木編年の詳細が明らかにされた（伊東編1981）。また、山陽自動車道建設に伴う島田川流域の弥生集落の調査成果に基づき、1990年代にかけて石井龍彦氏（石井1990）、乗安和二三氏（乗安1988・1989・1990a・b）、山本一朗氏（山本1993b）による後期から終末期の編年案が提示された。一方、中村友博氏（中村1993）、乗安和二三氏（乗安1995・1999）により、現在の編年観に直結する論考や編年案が提示されたほか、土井ヶ浜Ⅰ式の壺など、前期末に位置づけられることもあった内折口縁土器が中期前葉に盛行することが明らかとなった（村岡編1989・宝川編1992、山本1993a）。1990年代から2000年代にかけては、それまで後期末に位置づけられることが多かった吹越遺跡A－4号住居出土土器が庄内式併行期に位置づけられるようになったほか（山本1993b・田畑2001c・石井2004b）、畿内系土器の多くが古墳時代前期から出現することが明らかになりつつある（田畑2012a）

2000年代に相次いで刊行された概説書等で提示された編年では、資料や研究の状況を反映してか、周防・長門は一括されることが多かった（大久保2002、梅木2003、柴田2011）。しかし、近年では、年々蓄積される資料をもとに、編年や併行関係について具体的に考察した論考が相次いで発表されている（石井2000・2004b、田畑2004・2012a、山本2003・2005、蒲原2013）。

7. 各時期の編年観と今後の課題

前期から中期前葉（前期Ⅰ-1～中期Ⅰ期）

以下では、一部重複するが、研究史に触れつつ編年観と今後の課題について述べる。

長門における最古の弥生土器として、中ノ浜遺跡出土の壺が板付Ⅰ式に遡る可能性が指摘されてきた[註17]。しかし、小壺のみであり、他器種の内容が不明である点に問題が残る。延行条里遺跡では、刻目突帯文土器から弥生土器への移行状況を示す資料は存在するが（下條1990）、包含層資料であるため、詳細は定かではない。このほか、角島・沖田遺跡から刻目突帯文土器と板付Ⅰb式～Ⅱa式土器が出土しているが、遺構に伴うものではなく、両者の関係は不明である（古庄2000、田畑2003a）。

周防では最古の弥生土器として小路遺跡12号溝出土土器（豆谷1995）が知られているが、遺跡の位置する山口盆地では最終末の刻目突帯文土器がほとんど出土していないため、両者の関係は不明である。周防東部では、遺構に伴わないものの、上関町田ノ浦遺跡で刻目突帯文土器、初期遠賀川式土器が出土している（石井ほか2007、谷口ほか2011）。

筆者は綾羅木Ⅰ式とされた土器のうち、EⅢ地区L.N.9出土土器以外は綾羅木Ⅱ式とされた土器と同段階に位置づけられると考えている（田畑2003b）。綾羅木郷遺跡では、珪砂採掘に伴う緊急発掘という

経緯から、遺物の層位的な取り上げを行えなかった遺構が少なからず存在する（伊東編1981）。上記の点を含め、近年（東ほか2013など）及び今後の調査による綾羅木編年の再検討が必要であろう。

前期後葉の長門西部の土器は、小田氏の論考（小田1957）以来、高槻式と呼称されることがある。近年、石井龍彦氏は長門・豊前の土器を含めた総称を高槻式とし、長門の土器を「綾羅木型」、豊前の土器を「豊前型」と呼んでいる（石井2008）。しかし、長門では綾羅木郷遺跡の調査により綾羅木式が設定され、石井氏により、高槻式との相違点が明らかとなっている（石井1984）。また、豊前では高槻式、長門では綾羅木式の名称が定着している関係上、総称として高槻式の名称を使用すると、どうしても豊前の土器をイメージしてしまうため、筆者は総称を綾羅木・高槻系土器とし、豊前の土器は高槻式、長門の土器は綾羅木式と呼称することを提唱した（田畑2013a）。なお、この段階は、小田富士雄氏により、周防灘文化圏とでも称しうる文化小期が設定できると指摘されている（小田1979）。これはこの段階に限らず、全時期にあてはまる重要な指摘である。

長門において土井ヶ浜Ⅰ式に代表される内折口縁をもつ大型壺は、早くに小田富士雄氏が中期に下る可能性を指摘していたが（小田1957）、前期末同様に貝殻施文による加飾されることや併行関係を知る資料がなかったため、1980年頃までは前期末に位置づけられることもあった（金関1980）。その後下七見遺跡（村岡1989、宝川1992）の発掘調査で綾羅木Ⅲ式系統の土器、城ノ越式土器、櫛描文土器が共伴することが判明し、その位置づけがほぼ確定した。この段階については、宝川昭男氏（宝川1992）、小南裕一氏（小南2007）等によって細分されることが指摘されている。中期前葉においては、綾羅木郷遺跡の位置する川中地域では城ノ越式土器が主体で内折口縁土器が少ない。一方、下七見遺跡が位置する田部盆地では、内折口縁土器の分布の中心域である。この地域は前期中葉から前期後葉まで下関市域を中心に分布する山形重弧文の分布の中心域であり、独自の地域色を保持していた。一方、長門北東部では前期後葉から中期中葉にかけて湯免式壺が分布している（田畑2001b）。

周防西部では、中郷貝塚出土土器を除くと、中期前葉の資料がきわめて少なかったため、東部を含めて櫛描文がほとんど存在しないと考えられていたが、1985年に西遺跡で櫛描文を施文した甕の出土が報告され（菅波1986）、1990年には赤妻遺跡で櫛描文と貝殻施文をもつ壺の胴部片の出土が報告された（増野ほか1990）。また、上東遺跡の調査（田畑編2001）により多数の良好な資料が得られた結果、周防西部では中期前葉に櫛描文が一定量存在することが確定的となった。なお、周防では前期後葉から中期前葉にかけて阿方式の影響がみられることが早くから指摘されていたが（潮見・藤田1966）、資料の増加に伴い筆者が検討した結果、綾羅木式をベースにしつつ、壺・甕の胴部に多条沈線を、壺の胴部に連鎖状突帯を施すなど、阿方式の具体的な影響が明らかとなった（田畑1999）。

周防東部では、前期後葉から中期前葉の遺跡の調査事例が少ない。田ノ浦遺跡（石井編2007）からは貝殻施文と連鎖状突帯をもつ壺、林遺跡SD19（尾崎編1993）からは櫛描文を施文する甕が出土しており、阿方式の強い影響下にある土器群の存在が推測される。

中期中葉（中期Ⅱ期）

長門西部では、須玖Ⅰ式中段階に併行する遠賀川以東の須玖系土器がみられるが、資料は少ない。一方、下七見遺跡では内折口縁土器がみられるなど、前段階の要素を残した土器がみられる。周防では1990年代前半まで、櫛描文をもたない垂下口縁壺A類がこの段階に位置づけられてきたが、『島田川』の編年（小野1953b）以来、中期末に位置づけられてきた櫛描文をもつ垂下口縁壺A類も基本的にはこの段階に位置づけられることが判明した（乗安1995）。また、内折口縁土器の一部（図55-9～11）は後期の複合口縁土器につながる新しい属性を備えた土器と評価されたこともあったが（中野1984、山本1

993など）、該当する土器の多くはこの段階に属すると考えられる。

筆者はこの段階は古相・新相に細分でき、新相には中山Ⅳ式の壺に近似し、口縁部がより発達し、櫛描文により顕著に加飾するタイプが出現することを指摘した（田畑2004）。本稿では古相をⅡ－1期、新相をⅡ－2期と呼称する。併行関係については、かつて佐原真氏・小田富士雄氏により、須玖Ⅰ式－土井ヶ浜Ⅱ・Ⅲ式－中山Ⅳ式の併行関係が示されたが（佐原・小田1979）、土井ヶ浜Ⅱ式は須玖Ⅰ式新段階～須玖Ⅱ式古段階の土器であるため、土井ヶ浜Ⅲ式とともに次段階（中期Ⅲ期）に位置づけられる（田畑2013a）。

中期後葉（中期Ⅲ～Ⅳ期）

古相（中期Ⅲ期）、新相（中期Ⅳ期）に大別される。古相は垂下口縁壺B類が出現する段階である。長門西部では、土井ヶ浜Ⅲ式のような瀬戸内系土器もみられるが、基本的には須玖系土器単純組成となる。一方、周防西部では須玖系土器と垂下口縁壺B類が共伴することが判明している。中野一人氏らにより須玖Ⅱ式－中山Ⅳ式（中野・吉瀬1979、中野1983・1984）の併行関係、山本一朗氏（山本1979・1981）、小野忠熙氏（小野1985）により、須玖Ⅱ式－周防6式－畿内Ⅲ様式後半の併行関係が示され、中村友博氏（中村1993）によって垂下口縁壺B類が須玖Ⅱ式及び凹線文土器と同時性があることが指摘された。筆者の編年観では、古相は須玖Ⅰ式新段階～須玖Ⅱ式古段階及び畿内のⅢ様式後半に併行する伊予中部の中期Ⅱ新、安芸のⅢ－2様式が併行する（田畑2004）。また、頸部の貼付突帯上に棒状浮文をもつ垂下口縁壺B類は、中国・四国地方の類例（柴田2004）から、ほとんどが古相に属すると考えられる。

新相は須玖系土器が増加する段階である。かつては袋状口縁壺が分布しないことから須玖系土器が衰退するとされたこともあったが（山本1979・小野1985）、資料が増加した結果、この段階が最盛期であることが判明した。長門西部においては、須玖系土器単純組成を基本とすることが知られてきた。近年の資料を踏まえると、①響灘沿岸部の遺跡では、袋状口縁壺、鋤先口縁甕、甕棺（有馬2005）など、遠賀川以西の須玖系土器が分布すること、②須玖系土器の分布は周防西部を東限とするが、ここでは主に遠賀川以東系の須玖系土器が分布すること、③前段階までと異なり、須玖系土器のみが出土する遺構が多くなることを指摘できる。この段階の垂下口縁壺B類の類例は少ないが、口縁部の山形文、頸部の貼付突帯は保持するものの、口縁部が水平に近くなったものや、口縁部内面の貼付突帯をもたないものなど、前段階の装飾性が失われたものが増加するようである。また、この段階には近年の資料から凹線文土器及び折衷土器のほか、伊予系高坏が少量みられることが判明した（梅木2004b、石川編2013）。

新相は須玖Ⅱ式新段階から高三潴式古段階の土器を含む。長門においては、宮ヶ久保遺跡A溝上層出土土器や北迫貝塚出土土器で須玖Ⅱ式新段階～高三潴式古段階の土器を含む。周防西部においては、下東遺跡（Ⅱ）1号溝出土土器や吉田遺跡第Ⅰ地区A区不整形のピット出土土器は須玖Ⅱ式新段階の土器を含む。前述のように新相のうち、周防東部では小谷遺跡SB10、19出土土器にみられる胴部の張り出しが顕著になった甕は新しい段階に位置づけられると考えている。新相は須玖Ⅱ式新段階～高三潴式古段階と中予のⅣ様式、安芸のⅣ－1・2様式に併行すると考えられるが、九州においても須玖Ⅱ式土器と高三潴式との細分案には諸説あり、確定していないため（平2004）、詳細は今後の検討が必要である。

後期前葉（後期Ⅰ－1～2期）

周防・長門の後期から終末期の編年は、前述のように主に1980年代に調査された周防東部の島田川流域における弥生遺跡の調査成果をもとに、1980年代末から1990年代にかけてその骨格が提示され

た。

後期前葉は古相（後期Ⅰ－1期）、新相（後期Ⅰ－2期）に大別され、高三潴式新段階との併行関係が考えられる。長門では古相の様相は不明確であるが、須玖系土器が激減し、山陰系・瀬戸内系土器の流入が顕著となるようである。特に長門北東部ではこの段階以降、山陰系土器が顕著に存在する（高下1986）。周防西部では良好な資料がない。周防東部で基準資料となる中院遺跡SD－1出土土器は中期末に位置づける説もあるが（石井2004a・b）、伊予系高坏から、中予地域の後期Ⅰ－1期に併行すると考えられる。

新相になると、周防東部ではこの段階に口縁部に凹線、頸部に多条沈線をもつ瀬戸内系長頸壺がみられる。かつては、垂下口縁壺が複合口縁壺に変化すると考えられていたが（中野1977、山本1979・1982）、出現期の複合口縁壺が頸部や口縁部の立ち上がりに沈線をもつことから、筆者はこれらの長頸壺をベースに北部九州の袋状口縁系壺の影響を受けて、複合口縁壺が成立したと考えている（田畑2012a）。

後期中葉から後葉（後期Ⅱ－1～2期）

後期中葉は複合口縁壺が定型化する段階である。長門北東部では、羽場遺跡SB4・8から下大隈式古段階併行の複合口縁壺が出土しており、基準資料とされてきた（乗安1989・1990a・b）。その後、長門西部では船頭遺跡V地区SD24出土土器（谷口ほか1995）からも下大隈式古段階併行の壺が出土している。この段階から終末期にかけて、周防と伊予を中心として近似した複合口縁壺が分布することから、筆者は上記の複合口縁壺を「防予系複合口縁壺」と呼称することを提唱している（田畑2012a）。近畿地方や山陰地方などへの搬出品の詳細を明らかにするためにも、今後、固有の地域色を抽出し、細分を進める必要がある。

周防西部では良好な資料がない。周防東部では、畑岡遺跡35号段状遺構出土土器を標識とする。上記を清水遺跡出土土器と同段階とする説があるが（乗安1990a）、複合口縁壺の複合口縁部、頸部に多条沈線を持つ点に後期前葉からの系譜を追えること、以上の点が中予地域の後期Ⅱ－1の複合口縁壺に近似していることから、この段階に位置づけられる（田畑2012a）。

後期後葉において、長門西部・周防西部では良好な資料に欠けるが、高島式に近似した高坏が存在するため、高島式に近似した土器群の存在が予想され、下大隈式新段階との併行関係が考えられる。筆者はこの段階以降の高坏は時期が下るにつれ、口縁部の外反が進んで屈曲が失われることが編年の指標になると考えている（田畑2012a）。

周防東部において、後期後葉は1960年代後半には複合口縁壺が出現する段階（潮見・藤田1966）、1970年代末から1980年代にかけては複合口縁壺が定型化する段階とされ、「吹越式」・「吹越式土器群」とも呼ばれてきた（山本1979・1981）。複合口縁壺の頸部に沈線を持つものがきわめて少なくなり、頸部は無文か1条の貼付突帯を持つものが主体となる。なお、大型器台についてはその出現をさらに遡らせる説もあるが（石井2004b）、出現するのは後期後葉と考えられる。

終末期（終末期Ⅰ～Ⅱ期）

古相（終末期Ⅰ期）・新相（終末期Ⅱ期）に大別される。長門西部・周防西部では、高島式土器に近似した土器から古相が西新町式古段階の大半と、久住猛雄氏の編年（久住1999）のⅠA期、後半が西新町式土器新段階の大半とⅠB期に併行すると考えられる。周防西部では「佐波型複合口縁壺」（山本1981）が古相に出現する。周防東部では、古相は2段階に細分でき（田畑2012a）、前半が清水遺跡9号段状遺構、2号、12号住居出土土器等、後半に吹越遺跡A－4号住居出土土器が位置づけられる。吹越

遺跡Ａ－４号住居出土土器については、①後期末[註18]（山本1979・1981、中野1984、乗安1990b）、②庄内式併行期（吉田1985、山本1993、石井2004、田畑2012a）、③古墳時代初頭（山本2003・2005）に位置づける案が出されている。①については、庄内式併行期に畿内系土器の存在を想定していたことからくる案で、②、③については、独自の土器様相を考慮しての案であるが、前述の通り②が妥当と考えられる。また、吹越遺跡Ａ－４号住居出土土器のイメージがあまりに強いが、この段階には大型壺などにさらに複数タイプが存在するようであり、今後の資料の増加が待たれる。なお、島田川上流域に位置する清水遺跡では、口縁部に段を持つ独自の高坏が分布しており、他地域と高坏で比較することが困難であるため（田畑2012a）、今後中・下流域の遺跡の資料による検証が必要であろう。

新相は、高坏坏部の屈曲がほぼ失われる段階であるが、次段階以降の土器との識別が課題である。また、この段階以降、長門北部以外でも山陰系土器が顕著にみられるようになるが、時期的にまとまった資料が少ないため、その分布状況（高下1986）についてはさらに検討する必要がある。

古墳前期（Ⅰ-1～3期）

布留系土器に代表される畿内系土器が出現する段階である。前稿（田畑2012a）では久住氏編年のⅡＡ～ⅡＢ期に併行する段階としていたが、大区分としてⅡＡ～ⅡＣ期、西新町式新相の一部から柏田式古相（田崎1983・1996b）、畿内の布留０～１式に併行する段階と訂正したい。

周防・長門においては、畿内系土器は伝統的Ｖ様式系、布留系が主体で庄内系が少ないことが判明している。伝統的Ｖ様式系の甕はかつては終末期（庄内式併行期）に位置づけられていたが（乗安1990b、山本1993）、確実に終末期に位置づけられる遺構から出土しておらず、多くはこの段階に出現するとみられる。また、湯田楠木町遺跡出土土器は庄内式併行期に位置づけられてきたが（山本1981・1993等）、近年の再検討でこの段階に属することが判明した（田畑2000b・2012b）。

長門西部ではこの段階のまとまった資料として、吉永遺跡Ⅲ－東地区ＳＢ5出土土器（西田編1999）、周防西部では湯田楠木町遺跡土器捨て場出土土器（田畑2012b）がある。両者からはいずれも伝統的Ｖ様式系の甕が出土している。久住氏によれば、伝統的Ｖ様式系の甕は概略的には①平底→②丸底→③丸底でタタキメをナデ消すものに変遷するので、これに従えば、吉永遺跡Ⅲ－東地区ＳＢ5出土土器の甕は①であるためⅡＡ期併行、湯田楠木町遺跡土器捨て場出土土器は②が多いため、主体はⅡＢ期併行の土器である[註19]。なお、長門西部では下七見遺跡第Ⅱ地区ＳＤ2、武久川下流域条里遺跡南西隅土器溜まり（上山編2004）から①・②を含む土器が出土している。前者は時期幅をもつとみられるが、後者は出土状況と小さな平底・丸底をもつ甕と終末Ⅱ期と近似した高坏がみられることから、ⅡＡ期併行の土器が主体と考えられる。また、壺・甕の形態、調整等からⅡＣ期併行と考えられる資料として、吉永遺跡Ⅲ－東地区ＳＢ3出土土器（西田編1999）、秋根遺跡ＬＫ091出土土器（伊東・山内編1977）がある[註20]。

周防東部ではこの段階の資料は僅少であったが、近年報告された開明遺跡SI2出土土器（石川編2013）では、布留系甕のほか小さな平底を持つ伝統的Ｖ様式系の甕がみられることからⅡＡ期併行の土器が主体と考えられる。また、山本一朗氏（山本2003・2005）が古墳時代前葉とした林遺跡ＳＢ3出土土器は、量は少ないものの、小型丸底壺の形状からⅡＣ期併行と考えられる。

以上のように、この段階は久住氏の編年に対応する土器が存在する。また、甕は伝統的Ｖ様式系が多いことから、その変遷を押さえることが重要である。ただし、各地域で明確に変遷が確認できず、特に複合口縁壺など在来系土器の変遷が不明確である点に問題が残る。地域や遺跡により跛行性が存在することも想定しなければならない。以上から、今後の資料の増加を踏まえてさらに検討する必要があるが、ⅡＡ～ⅡＣ期併行期を各々古墳前期Ⅰ－1期、Ⅰ－2期、Ⅰ－3期としておきたい。

8．おわりに

以上、周防・長門における弥生時代前期から古墳時代前期前半の土器編年をめぐる研究史と今後の課題について述べてきた。これまで多くの研究者が試行錯誤を重ねた研究成果が、現在の編年観に反映されており、その経緯はきわめて複雑であった。改めて先行研究に深い敬意を表したい。残された課題は多いが、本稿が今後の研究に生かされれば幸いである。なお、紙幅の都合により、参考文献のうち、上記で述べた論考で引用されている報告書の一部は掲載を割愛した。

謝辞

本稿執筆にあたっては下記の諸氏・諸先生・諸機関にお世話になりました。末筆ながら記して感謝いたします。また、本稿を東哲志氏、豆谷和之氏、山本一朗先生の御霊前に捧げます。

石井龍彦、岩崎仁志、梅木謙一、梅崎恵司、久住猛雄、古賀信幸、小林善也、小南裕一、杉原和惠、田崎博之、中村友博、西岡義貴、乗安和二三、松岡睦彦、村田裕一、岩国市教育委員会、下関市教育委員会、土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム、防府市教育委員会、山口県埋蔵文化財センター、山口市教育委員会、山口大学人文学部考古学研究室

【註】

1） 口頭発表資料については全てを掌握していないため、一部を除いて言及していないことをご寛恕願いたい。

2） 森本氏は弘津史文氏の資料（弘津1929）と自身の踏査資料から、長門の弥生土器を古・新に分類できると指摘した。

3） 周防・長門は西部瀬戸内地方として安芸・伊予と一括され、A－Cの3様式に分けられた。筆者の編年観では、A様式は前期後葉から中期中葉、B様式は中期中葉から中期後葉、C様式は後期中葉から後葉に位置づけられる。また、この段階ではC様式は中期（畿内三様式後半～四様式併行）ととらえられていた。

4） 小野氏は古墳時代の一部についても「土師式前期」、「中期」に細分している。このうち「土師式前期」の土器には、筆者の編年観で古墳時代前期から中期の土器が含まれる。

5） 金関恕氏も同様な指摘をしている（金関1964）。

6） 図53のうち、図53-5、13は図示されていないが、金関1964から該当すると考えられる土器がほぼ特定できるので、同書から引用した。また、図53-9、12、14は金関1964の図を引用した。

7） Ⅲ式はⅢ－1、2、3に細分されると指摘したが、この段階で具体的な説明はなかった。

8） 佐原氏は綾羅木Ⅳ式の併行関係について「初期櫛描文と綾羅木Ⅳとの平行関係は、なお直接的には証明できていない。両者の共存関係は近い将来、かならずや長門・周防・石見・安芸のいずれかにおいて証明されるだろう。」と述べた（佐原1979）。

9） Ⅲ式で短頸無文壺とされたものの一部が相当する。

10） Ⅲ期とされる18号土壙出土土器、36号土壙出土土器は図を見るかぎり、時期幅をもつ土器を含んでいる可能性がある（菅波第33図26、第47図25～27など）。このため、その妥当性については再検討が必要であろう。

11） 吉田1985a・bについては、掲載誌が簡易製本であったことなどから、本稿執筆まで未見であった。これまで言及することができなかったことをお詫びする。

12） 長門西部では、臨海部の小規模な平野が形成過程にあったこと（高橋2003・2008）が大きな要因と考えられる。これまでの発掘調査成果をみると、川中平野、川棚平野、吉永平野、土井ヶ浜遺跡が位置する江尻下地区の低地部では中期中葉以降になると、終末期から古墳時代前期に至るまで集落遺跡はほとんど存在しない。

13） 近藤・乗安2000では乗安1996のⅡ-bo、Ⅱ-bn期はそれぞれ、Ⅱ-b古、Ⅱ-b新期と表記が改められた。

14） 田畑2012aではこの種の高坏を「く」字口縁と誤記していた。記してお詫びする。

15）久住猛雄氏より高島式の標識遺構である高島遺跡第2遺構出土土器は時期幅があるとの教示を受けた。ただし、筆者は田畑2012aで吉田遺跡本部2号館第1号土壙出土土器と比較した壺、高坏については終末期前半に位置づけられると考える。

16）山本一朗氏は「山口県（周防※筆者注）では、唐古第四様式に該当する中期後葉の土器を分離することは今も昔も困難である」としたが（山本1996）、筆者の編年観では、該当資料がきわめて少なかったとするのが正しいと考えている。

17）金関・大阪府立弥生文化博物館編1995での討論（同書P214～215）中で金関恕氏・橋口達也氏によって述べられている。

18）山本氏は吹越遺跡A-4号住居出土土器を含む9式を纒向1式併行ととらえていた（山本1979・1981）。現在の編年観では纒向1式は庄内式古相の一部を含むが、山本氏は10式を庄内式併行期としていたため、ここに含めた。

19）久住猛雄氏のご教示による。

20）久住猛雄氏のご教示による。

参考文献

有馬啓介2005「下関市豊北町宮迫神田遺跡の大型甕形土器」『山口考古』第25号 山口考古学会

石井龍彦1984「高槻式土器について」山口大学人文学部考古学研究室編『西部瀬戸内における弥生文化の研究』

石井龍彦1990「第5章 まとめ」『石光遺跡』山口県埋蔵文化財調査報告第124集

石井龍彦2000「山口県西部の弥生時代後期後半～古墳時代初頭の土器について」『陶塤』第13号 山口県埋蔵文化財センター

石井龍彦2004a「周防部の弥生後期前葉の土器について－郷遺跡出土土器をめぐって」『海峡の地域史－水島稔夫追悼集－』水島稔夫追悼集刊行会

石井龍彦2004b「山口県東部（周防）の弥生時代後期の土器について」『陶塤』第17号 山口県埋蔵文化財センター

石井龍彦編2007『田ノ浦遺跡』山口県埋蔵文化財センター報告第59集

石井龍彦2008「第四編第三章 本州西端に花開いた土器文化」『山口県史』通史編 原始・古代 山口県

石川影編2013『開明遺跡・尾尻遺跡』（山口県埋蔵文化財調査報告第81集 田布施町埋蔵文化財調査報告第3集）

池田善文1979「Ⅱ 山口県中央部の弥生遺跡（1）」『山口県の弥生式土器－集成と編年－』周陽考古学研究所

伊東照雄1977「山口県西部の弥生式土器－北浦沿岸を中心として」『山口考古』6号 山口考古学会

伊東照雄・山内紀嗣編1977『秋根遺跡』下関市埋蔵文化財調査報告22

伊東照雄編1981『綾羅木郷遺跡Ⅰ』下関市埋蔵文化財調査報告書27

伊東照雄1983「山口県北浦沿岸の弥生土器」『山口考古創立10周年記念特集号』山口考古学会

伊藤実1992「備後地域」正岡睦夫・松本岩雄編『弥生土器の様式と編年－山陽・山陰編－』木耳社

伊藤実1996「安芸」『古代学協会四国支部松山大会資料弥生後期の瀬戸内海』古代学協会四国支部

伊藤実2001「安芸（西条盆地）地域の庄内期の土器様相」『庄内式土器研究ＸＸＶ』庄内式土器研究会

岩崎仁志2008「第四編第五章第二節 土器にみる文化の交流」『山口県史』通史編 原始・古代 山口県

上山佳彦編2004『武久川下流域条里遺跡』山口県埋蔵文化財センター調査報告第42集

梅木謙一1996a「複合口縁壺の動態－西部瀬戸内における地域圏の成立と展開－」『古代学協会四国支部松山大会資料 弥生後期の瀬戸内海』古代学協会四国支部

梅木謙一1996b「伊予」『古代学協会四国支部松山大会資料 弥生後期の瀬戸内海』古代学協会四国支部

梅木謙一2000「伊予中部地域」菅原康夫・梅木謙一編『弥生土器の様式と編年－四国編－』木耳社

梅木謙一2001「伊予中部の土器」『庄内式土器研究ＸＸⅣ』庄内式土器研究会

梅木謙一2002「伊予・周防出土の細長頸複合口縁壺について」『山口考古』第22号 山口考古学会

梅木謙一2003「第2章 中国・四国地方の土器」武末純一・石川日出志編『考古資料大観 弥生・古墳時代土器Ⅰ』小学館

梅木謙一2004a「四国の弥生中期中葉～後期前葉の土器」『第53回埋蔵文化財研究集会弥生中期土器の併行関係 発表要旨

集』埋蔵文化財研究会

梅木謙一2004b「周防出土の伊予型高杯」『海峡の地域史－水島稔夫追悼集－』 水島稔夫追悼集刊行会

梅﨑恵司1996「東北部九州－北豊前」『古代学協会四国支部松山大会資料　弥生後期の瀬戸内海』古代学協会四国支部

梅﨑恵司2005「東北部九州の弥生時代中期から後期前半の土器－須玖式土器の終焉－」『(財)北九州市芸術文化振興財団埋蔵文化財調査室研究紀要』第19号

大久保徹也2002「第2章 中国・四国地方の土器」赤塚次郎編『考古資料大観 弥生・古墳時代土器Ⅱ』小学館

岡本健児1982「伊予・周防灘沿岸地域における中期中葉の弥生土器－柳井田・天王A系列の土器について－」『賀川光夫先生還暦記念論集』賀川光夫先生還暦記念論集編集委員会

岡本健児1984「四国の弥生土器の編年と年代」『高地性集落と倭国大乱』雄山閣

尾崎雅一編1993『林遺跡』山口県埋蔵文化財調査報告第159集

小野忠熙1953a「第Ⅱ章 岡山遺跡」小野忠熙編『島田川』山口大学島田川遺跡学術調査団

小野忠熙1953b「第Ⅴ章第1節1 土器の分類」小野忠熙編『島田川』山口大学島田川遺跡学術調査団

小野忠熙1956「塁・壕遺構を有する一古代村落址の研究」『山口大学教育学部記念論文集』

小野忠熙1958「山口県下関市綾羅木弥生式遺跡」『考古学雑誌』第43巻4号 日本考古学会

小野忠熙・隈昭志・中野一人・藤田等1968「北迫遺跡」『宇部の遺跡』宇部市教育委員会

小野忠熙編1979『高地性集落跡の研究 資料篇』学生社

小野忠熙1985『山口県の考古学』吉川弘文館

小田富士雄1957『長門下関周辺の弥生土器』(小田富士雄1983『九州考古学研究 弥生時代篇』所収)

小田冨士雄1976『高島遺跡』北九州市埋蔵文化財調査会

小田富士雄1979「北九州と西部瀬戸内における弥生土器編年」小野忠熙編『高地性集落跡の研究 資料篇』学生社

柿本春次1979「出土遺物」井上武彦・柿本春次編『下関市寺秋遺跡 三隅町湯免遺跡』山口県埋蔵文化財調査報告第47集

金関丈夫・坪井清足・金関恕1961「山口県土井ヶ浜遺跡」『日本農耕文化の生成』日本考古学協会

金関恕1964「山陰地方Ⅰ」小林行雄・杉原荘介編『弥生式土器集成 本編1』東京堂出版

金関恕1980「北浦における弥生前期の社会」『日本民族文化とその周辺－考古篇』新日本教育図書

金関恕・大阪府立弥生文化博物館1995『弥生文化の成立 大変革の主体は「縄紋人」だった』角川選書

蒲原宏行2013「西日本における弥生土器諸様式の併行関係」柳田康雄編『弥生時代政治社会構造論』雄山閣

河島清・前田耕次1987『岡山遺跡』山口県埋蔵文化財調査報告第99集

木太久守1990「豊前北部における板付Ⅱ式土器の再検討」『研究紀要』第4号 (財)北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室

久住猛雄1999「北部九州における庄内式併行期の土器様相」『庄内式土器研究ⅩⅨ』庄内式土器研究会

高下洋一1986「山口県出土のいわゆる山陰系土器について」Relics 第3号 山口大学人文学部考古学研究室

国分直一ほか1974「座談会綾羅木郷遺跡調査の十年」国分直一ほか編『えとのす』第1号 新日本教育図書

小林行雄・森本六爾編1939『弥生式土器聚成図録』東京考古学会学報第1冊

小南裕一編2007『下村遺跡』山口県埋蔵文化財センター調査報告第60集

小南裕一2008「長門西部地域における弥生文化成立期の集落様相」『陶塤』第21号 山口県埋蔵文化財センター

小林行雄・末永雅雄・藤岡謙二郎1943『大和唐古弥生式遺跡の研究』奈良県史跡名勝天然記念物調査会報告第16冊 奈良県

近藤喬一・乗安和二三2000「弥生前期の土器文様」『山口県史 資料編考古1』山口県

佐原真1964「土器の相対年代」詫間町文化財保護委員会編『紫雲出』真陽社

佐原真・小田富士雄1979「Ⅳ－1北九州と畿内の弥生土器編年の調整」小野忠熙編『高地性集落跡の研究資料篇』学生社

佐原真1979「Ⅳ－3畿内弥生土器から見た西・東の弥生土器」小野忠熙編『高地性集落跡の研究資料篇』学生社

潮見浩・藤田等1966「弥生文化の発展と地域性－中国・四国」『日本の考古学Ⅲ』河出書房

柴田昌児2004「伊予東部の中期後半弥生土器の動態」『第53回埋蔵文化財研究集会弥生中期土器の併行関係発表要旨集』埋蔵文化財研究会

柴田昌児2011「二 中・四国西部地域」甲元眞之・寺沢薫編『講座日本の考古学5 弥生時代(上)』青木書店

下條信行1990「縄文晩期－弥生前期の土器」下関市教育委員会編『綾羅木川下流域の地域開発史』

下條信行1991「松山平野と道後城北の弥生文化」松山市教育委員会編『松山大学構内遺跡』

下條信行1993「西部瀬戸内における出現期弥生土器の様相」坪井清足さんの古稀を祝う会編『論苑考古学』天山舎

菅波正人1986「2 弥生時代前期末～中期初頭の土器群について」山口市埋蔵文化財調査報告第21集

瀬尾周三1992「安芸地域」正岡睦夫・松本岩雄編『弥生土器の様式と編年－山陽・山陰編－』木耳社

関川尚功1976「纒向遺跡の古式土師器」『纒向』奈良県橿原考古学研究所

高橋学2003『平野の環境考古学』古今書院

高橋学2008「第一編第四章 原始・古代の環境変化・土地開発・災害」『山口県史』通史編 原始・古代 山口県

田崎博之1983「古墳時代初頭前後の筑前地方」『史淵』第120号 九大史学会

田崎博之1996a「基礎資料:各地域における弥生時代後期土器の様相」古代学協会四国支部編『古代学協会四国支部松山大会資料弥生後期の瀬戸内海』

田崎博之1996b「筑前」『古代学協会四国支部松山大会資料 弥生後期の瀬戸内海』古代学協会四国支部

田崎博之1996c「南豊前」『古代学協会四国支部松山大会資料 弥生後期の瀬戸内海』古代学協会四国支部

田崎博之1998「Ⅳ 九州系の土器からみた凹線文系土器の時間的位置」下條信行編『日本における石器から鉄器への転換形態の研究』

田崎博之2000「壺形土器の伝播と受容」『突帯文と遠賀川』土器持寄会論文集刊行会

宝川昭男編1992『下七見遺跡Ⅱ』菊川町教育委員会

谷口哲一編2011『田ノ浦遺跡Ⅱ』山口県埋蔵文化財センター報告第74集

谷口哲一・山本寛子2011「真尾猪の山遺跡第Ⅰ地区出土土器(補遺)」『陶塤』第21号 山口県埋蔵文化財センター

田畑直彦1999「綾羅木式土器と阿方式土器」『山口大学文学会誌』第49号 山口大学文学会

田畑直彦2000a「西日本における初期遠賀川式土器の展開」『突帯文と遠賀川』土器持寄会論文集刊行会

田畑直彦2000b「付篇Ⅲ 山口市湯田楠木町遺跡出土の古式土師器」『山口大学構内遺跡調査研究年ⅩⅣ』山口大学埋蔵文化財資料館

田畑直彦2001a「Ⅴ考察2 上東・下東遺跡群の土器編年」田畑直彦編『上東遺跡弥生時代遺物編』山口市埋蔵文化財調査報告第77集

田畑直彦2001b「湯免式壺について－角島・沖田遺跡出土土器の新資料－」『山口考古』第21号 山口考古学会

田畑直彦2001c「周防・長門における庄内式併行期の土器様相」『庄内式土器研究ＸＸＶ』庄内式土器研究会

田畑直彦2003a「長門北浦地域における弥生文化の成立」『立命館大学考古学論集Ⅲ－1』立命館大学考古学論集刊行会

田畑直彦2003b「山陰地方における綾羅木系土器の展開」『山口大学考古学論集』山口大学考古学論集刊行会

田畑直彦2004「周防・長門における弥生中期の土器と並行関係」『第53回埋蔵文化財研究集会弥生中期土器の併行関係発表要旨集』埋蔵文化財研究会

田畑直彦2006a「山口県島田川流域の弥生集落－中流域遺跡群を中心として－」『日本考古学協会2006年度愛媛大会研究発表資料集』日本考古学協会2006年度愛媛大会実行委員会

田畑直彦2006b「響灘沿岸の弥生土器」『第11回土井ヶ浜シンポジウム合併記念 響灘沿岸の弥生時代 資料集』

田畑直彦2006c「長門北東部における弥生時代中期土器の様相」『やまぐち学の構築』2

田畑直彦2012a「周防西部・東部における弥生時代後期から古墳時代初頭の土器編年」『山口大学埋蔵文化財資料館年報－平成20年度－』山口大学埋蔵文化財資料館

田畑直彦2012b「湯田楠木町遺跡」『山口市史 史料編 考古・古代』山口市

田畑直彦2013a「弥生土器からみた土井ヶ浜弥生人」『立命館大学考古学論集Ⅵ』立命館大学考古学論集刊行会

田畑直彦2013b「延行条里遺跡出土の初期遠賀川式土器について」『山口考古』第33号 山口考古学会

坪井清足1961「山口県豊浦郡豊北町土井ガ浜遺跡の土器」小林行雄・杉原荘介編『弥生式土器集成資料編2』日本考古学協会

寺沢薫1986「畿内古式土師器の編年と2・3の問題」『矢部遺跡』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告49 奈良県立橿原考古学研究所

中野一人1960『山口県の弥生式土器集成図録』

中野一人1962「弥生式土器からみた山口県の文化領域」『考古学研究』第9巻3号 考古学研究会

中野一人1965「山口県の弥生文化－弥生式土器の変遷－」『山口県地方史研究』第13号 山口県地方史学会

中野一人1972「本州西端地域の古式土師器資料(第一報)」『山口県立博物館研究報告』第2号 山口県立博物館

中野一人1977「弥生式土器からみた山口県域の地域性」『山口考古』第6号 山口考古学会

中野一人1983「河池と井上山」『山口考古創立10周年記念特集号』山口考古学会

中野一人1984「山口県域の弥生土器の地域性」『高地性集落と倭国大乱』雄山閣

中村友博1993「柳田式の壺形土器」『古文化談叢』第30集上 九州古文化研究会

西田宏編1999『吉永遺跡(Ⅲ－東地区)』山口県埋蔵文化財センター調査報告第10集

乗安和二三・吉瀬勝康編1979『井上山』防府市都市開発公社

乗安和二三1988「防長弥生時代後期土器編年の再検討」第66回山口考古学談話会発表資料※筆者未見

乗安和二三1989「Ⅴまとめ」『羽場遺跡・片山遺跡』山口県埋蔵文化財調査報告第121集

乗安和二三1990a「第7章 まとめ」『畑岡遺跡』山口県埋蔵文化財調査報告第125集

乗安和二三1990b「山口県(防長地域)」『瀬戸内の弥生後期土器の編年と地域性』古代学協会四国支部

乗安和二三1995「山口県東部地域弥生時代中期土器の編年」第99回山口考古学談話会発表資料

乗安和二三1996「山口県の前期弥生土器」『山口考古学談話会百回記念大会 西部瀬戸内の弥生文化～前期弥生土器の諸相～』山口考古学談話会百回記念大会実行委員会

乗安和二三1999「山口県西部地域の弥生後期土器編年表」(試案)『九州弥生土器研究会資料』

濱崎真二1997「柳瀬遺跡出土の弥生時代後期から古墳時代初頭の土器」『柳瀬遺跡』下関市埋蔵文化財調査報告60

原田光朗1999『下右田遺跡第9・10・13・14・15・17次発掘調査概報』防府市教育委員会

東哲志ほか2013『綾羅木郷台地遺跡(中屋敷地区他)発掘調査報告書』下関市文化財調査報告書34

平美典2004「弥生中期土器の併行関係の現状と編年的課題－北部九州における中末後初の移行期をめぐって－」『九州考古学』第79号 九州考古学会

弘津史文1928『防長弥生式土器図集 先史時代之部』

弘津史文1929『防長石器時代資料』山口高等学校郷土史研究会

藤田等1968「宇部の弥生文化－弥生式土器を中心として－」『宇部の遺跡』宇部市教育委員会

冨士埜勇編1976『上原遺跡 発掘調査報告Ⅰ』菊川町教育委員会

古庄浩明2000『角島・沖田遺跡』山口県豊北町埋蔵文化財調査報告書第18集

古庄浩明2001「突帯文から綾羅木式へ」『法政考古学』第27集 法政考古学会

前島高雄1979「Ⅰ岩国市南河内 竹安遺跡出土の弥生土器」『山口県の弥生式土器－集成と編年』周陽考古学研究所

松村さを里2008「西部瀬戸内における弥生時代器台の展開について－伊予地方を中心に」下條信行編『妙見山1号墳－西部瀬戸内における初期前方後円墳の研究』愛媛大学考古学研究室

松本岩雄1992「出雲・隠岐地域」正岡睦夫・松本岩雄編『弥生土器の様式と編年－山陽・山陰編－』木耳社

豆谷和之1993「吉田遺跡第Ⅰ地区A区出土の弥生時代中期後半の土器について」『山口大学構内遺跡調査研究年報ⅩⅠ』山口大学埋蔵文化財資料館

豆谷和之1995「山口県弥生土器集成Ⅰ－山口市小路遺跡出土の前期弥生土器－」『山口大学構内遺跡調査研究年報ⅩⅢ』山口大学埋蔵文化財資料館

三戸田晃司ほか1985『奥正権寺遺跡Ⅱ・大崎岡古墳群・大崎遺跡』山口県埋蔵文化財調査報告第82集

村岡和雄編1989『下七見遺跡Ⅰ』菊川町教育委員会

村岡和雄編1998『宮ヶ久保遺跡』山口県阿東町埋蔵文化財調査報告第1集

森本六爾1930「長門発見の一彌生式土器」『考古学』第1巻第3号 東京考古学会

森本六爾・小林行雄編1938『彌生式土器聚成圖録』東京考古学会報第一冊 東京考古学会

山口県教育委員会編1961『山口県文化財概要第4集 埋蔵文化財』

山口県教育委員会編1979『下右田遺跡第3次調査概報』山口県埋蔵文化財調査報告書第46集

山本一朗ほか1972『高地性集落 吹越遺跡第2次調査概報』平生町教育委員会・山口県教育委員会

山本一朗1977「山口県東部の弥生式土器」『山口考古』6号 山口考古学会

山本一朗1979「Ⅲ 防長の弥生式土器」『山口県の弥生式土器－集成と編年』周陽考古学研究所

山本一朗1981「防長の土師器」『山口県の土師器・須恵器－集成と編年－』周陽考古学研究所

山本一朗1982「防長複合口縁壺の系譜」『考古学研究』第29巻第2号 考古学研究会

山本一朗1993a「山口県東部(周防)弥生前期土器編年」『古文化談叢』第30集(上) 九州古文化研究会

山本一朗1993b「山口県東部(周防)弥生後期土器編年」『考古論集－潮見浩先生退官記念論文集』潮見浩先生退官記念事業

山本一朗1993c「防予地域の弥生土器寸考」『遺跡』第34号 遺跡刊行会

山本一朗1996「山口県の弥生土器研究」『山口考古学談話会百回記念大会 西部瀬戸内の弥生文化～前期弥生土器の諸相～』山口考古学談話会百回記念大会実行委員会

山本一朗2003「吹越式の諸問題」『山口考古』第23号 山口考古学会

山本一朗2005「吹越式の再検討」『考古論集(川越哲志先生退官記念記念論集)』川越哲志先生退官記念論集刊行会

山本博1935a「西日本弥生式問題」『考古学雑誌』25巻10号 日本考古学会

山本博1935b「西日本弥生式問題」(其二)『考古学雑誌』25巻12号 日本考古学会

吉瀬勝康1983「山口県綾羅木郷遺跡出土の弥生式土器」『関西大学考古学研究室開設参拾周年記念考古学論叢』

吉瀬勝康1996「周防・長門」『古代学協会四国支部松山大会資料 弥生後期の瀬戸内海』古代学協会四国支部

吉田寛1985a「庄内式併行期前後の西部瀬戸内(Ⅰ)吹越A式に関するノート」Relics 創刊号 山口大学人文学部考古学研究室

吉田寛1985b「庄内式併行期前後の西部瀬戸内(Ⅱ)湯田楠木町遺跡出土土器に関するノート」Relics 第2号 山口大学人文学部考古学研究室

渡辺一雄編1985『よみがえる弥生のムラ－突抜・馬場遺跡－』山口県埋蔵文化財調査報告第87集

表 12　編年表

<table>
<tr><th>時代</th><th>時期</th><th>小時期</th><th>北部九州
（田崎 1983・1996a
1998・2000）</th><th>北部九州
（久住1999）</th><th>周防・長門
（本稿）</th><th>中予
（梅木2000・2001
2004a）</th><th>安芸
（妹尾1992）</th><th>出雲
（松本1992）</th></tr>
<tr><td rowspan="16">弥生時代</td><td rowspan="5">前期</td><td rowspan="2">前葉</td><td>板付Ⅰ式
新段階</td><td rowspan="16"></td><td>Ⅰ-1</td><td rowspan="2">Ⅰ-1</td><td rowspan="2">Ⅰ-1</td><td rowspan="2">Ⅰ-1</td></tr>
<tr><td>板付Ⅱ式
古段階</td><td>Ⅰ-2</td></tr>
<tr><td>中葉</td><td rowspan="2">板付Ⅱ式
中段階</td><td>Ⅱ</td><td>Ⅰ-2</td><td>Ⅰ-2</td><td>Ⅰ-2</td></tr>
<tr><td rowspan="2">後葉</td><td>Ⅲ-1</td><td>Ⅰ-3</td><td>Ⅰ-3</td><td>Ⅰ-3</td></tr>
<tr><td>板付Ⅱ式
新段階</td><td>Ⅲ-2</td><td>Ⅰ-4</td><td>Ⅰ-4</td><td>Ⅰ-4</td></tr>
<tr><td rowspan="7">中期</td><td>前葉</td><td>城ノ越式
（須玖Ⅰ式古）</td><td>Ⅰ</td><td rowspan="2">Ⅱ</td><td rowspan="2">Ⅱ</td><td rowspan="2">Ⅱ</td></tr>
<tr><td rowspan="2">中葉</td><td rowspan="2">須玖Ⅰ式
中段階</td><td>Ⅱ－1</td></tr>
<tr><td>Ⅱ－2</td><td>Ⅲ（古）</td><td>Ⅲ－1</td><td>Ⅲ-1</td></tr>
<tr><td rowspan="4">後葉</td><td>須玖Ⅰ式
新段階</td><td rowspan="2">Ⅲ</td><td rowspan="2">Ⅲ（新）</td><td rowspan="2">Ⅲ－2</td><td rowspan="2">Ⅲ-2</td></tr>
<tr><td>須玖Ⅱ式
古段階</td></tr>
<tr><td>須玖Ⅱ式
新段階</td><td>Ⅳ－1</td><td rowspan="2">Ⅳ</td><td>Ⅳ-1</td><td rowspan="2">Ⅳ-1</td></tr>
<tr><td>高三瀦式
古段階</td><td>Ⅳ－2</td><td>Ⅳ-2</td></tr>
<tr><td rowspan="5">後期</td><td rowspan="2">前葉</td><td rowspan="2">高三瀦式
新段階</td><td>Ⅰ-1</td><td>Ⅴ-1古</td><td>Ⅴ-1古</td><td rowspan="3">Ⅴ-1</td></tr>
<tr><td>Ⅰ-2</td><td>Ⅴ-1新</td><td>Ⅴ-1新</td></tr>
<tr><td>中葉</td><td>下大隈式
古段階</td><td>Ⅱ-1</td><td>Ⅴ-2</td><td>Ⅴ-2</td></tr>
<tr><td>後葉</td><td>下大隈式
新段階</td><td>後期後葉新相</td><td>Ⅱ-2</td><td>Ⅴ-3</td><td>Ⅴ-3</td><td>Ⅴ-2
Ⅴ-3</td></tr>
<tr><td rowspan="2">終末期</td><td>前半</td><td>西新町式
古段階</td><td>ⅠA</td><td>Ⅰ</td><td>Ⅴ-4古
（Ⅲ－1）</td><td>Ⅴ-4</td><td rowspan="3">Ⅴ-4</td></tr>
<tr><td>後半</td><td>西新町式
新段階</td><td>ⅠB</td><td>Ⅱ</td><td>Ⅴ-4新
（Ⅲ－2）</td><td>Ⅴ-5</td></tr>
<tr><td rowspan="4">古墳時代</td><td rowspan="4">前期</td><td rowspan="4">前半</td><td rowspan="2">有田式
古段階</td><td>ⅡA</td><td>Ⅰ-1</td><td rowspan="2">Ⅲ-3</td><td rowspan="4"></td></tr>
<tr><td>ⅡB</td><td>Ⅰ-2</td><td rowspan="3"></td></tr>
<tr><td>有田式
新相</td><td rowspan="2">ⅡC</td><td rowspan="2">Ⅰ-3</td><td rowspan="2"></td></tr>
<tr><td>柏田式古相</td></tr>
</table>